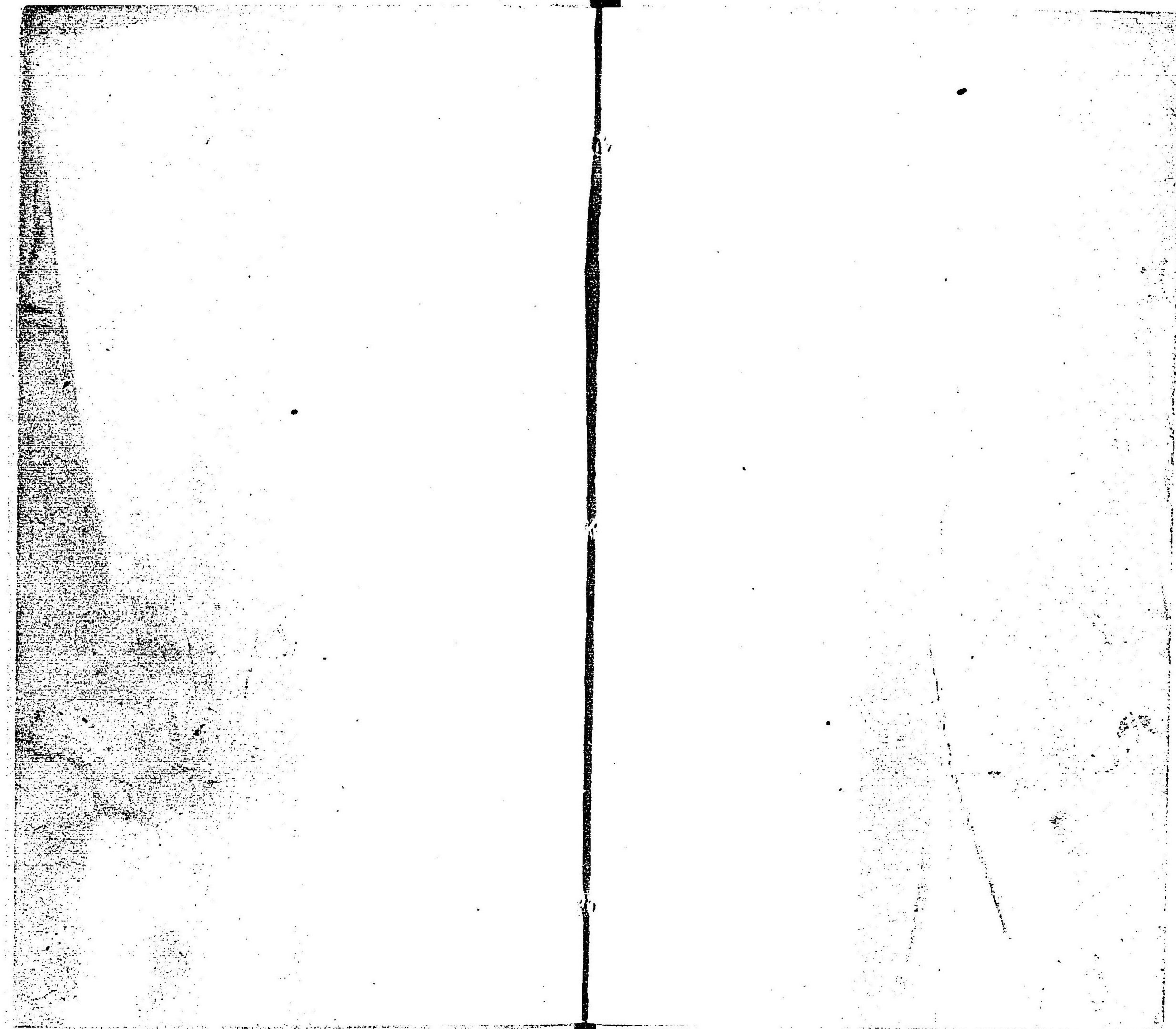


4/21 73

人情百話

老舍先生著
白柔生著

269
104



特 30
234

人情百話

白菊生 著

鹿兒島縣會副議長 兒玉好熊君題字
鹿兒島新聞社主筆 門馬延陵君跋
鹿兒島新聞記者 小林桃園君序文

鹿兒島聾啞學校發行

45. 3. 23
肉案

通稱傲

五部陳歌

跋

心の潔白と云ひ、腹の黒しと云ひ、赤誠を吐露すと稱す、様々の心の色あるが中に情の一字を唐様に青き心と書きたるも亦因縁あるべし、水や空の青きは本來の色にあらずと雖遙に見渡せば、蒼空碧海淼漫として際涯を知らず、翠煙青嵐變幻出沒極りなく、時あつて疾風妬雨となり、狂瀾怒濤を起す、其の轉化の妙、宇宙の一大文章を爲す、人情も亦斯の如し、情は常にあれども常に同じからず、其物に觸れ事に感じて發露するや、死生何ぞ論ずるに足らん、人生の喜悲劇孰れも情の戦争にして世界の傑作と稱せらるる詩歌戯曲の如き亦其巧妙なる描寫に過ぎざる耳、唯情や寫すべし之を説くべからず、説くべからざるにあらず説明して其肯綮に當り人をして感嘆せしむるの難きなり白菊君の此著其説明し難き所を巧に道破し、百話各趣

を異にして其間に連絡ある簡潔の辞變轉の妙、頗る讀者の歡迎を受けしは本稿が我が鹿兒島新聞紙上に連載せられし當時の事實に徴して明なり、是れ畢竟氏が青春燃ゆるが如き赤誠の同情を以て天真流露よく人情の琴線に觸れしに因るものか、冷靜嚴肅なる觀察者としては尙ほ多少の批議すべきものあらんも文想更に洗煉を加へば造詣未だ測るべからず、刮目して更に新篇の出づるを待たん

明治四十五年二月廿一日

鹿兒島新聞社編輯局にて
延 陵 生

序 文

多錢能く買ひ、長袖能く舞ふと、白菊君の如き情の人にして「人情百話」の著ある予は夫の二句を聯想せずんばあらず。題材の滾々盡きざる、趣味の津々禁すべからざる、抑も何によつて然る乎。予之を案するに君の文致上、何人も先づ看取すべきは文品の平易輕快なると簡明摯實なるにあらむ。平易に輕快を兼ね、これ世間の愛讀を値ひする所以、又其作が箴々他を動かすの概あるは簡明と摯實の賜にあらざるなきを得んや。而して予の殊に敬服するは叙來の點に於てよも君の血あり涙ある性格を一氣天真爛漫に披瀝し、所謂咳唾珠をなし筆を下せば千言立るに燦然章を成すの邊にあり。君の慈眼熱腸を以て社會人情の微に入り、精を穿ち、加ふるに半生の實歴を料理する行文に奇氣横逸し、情趣併せ到るは素より其所。君頃日

本書を携へて予に一言の批評を求めらる予は讀書人の誼、友愛の親、
之を辞する能はず、予の感じたるまことを記して君に答ふ。果して君
之を首肯するや否耶は予の問ふに違あらざる所也。

明治四十五年二月廿一日

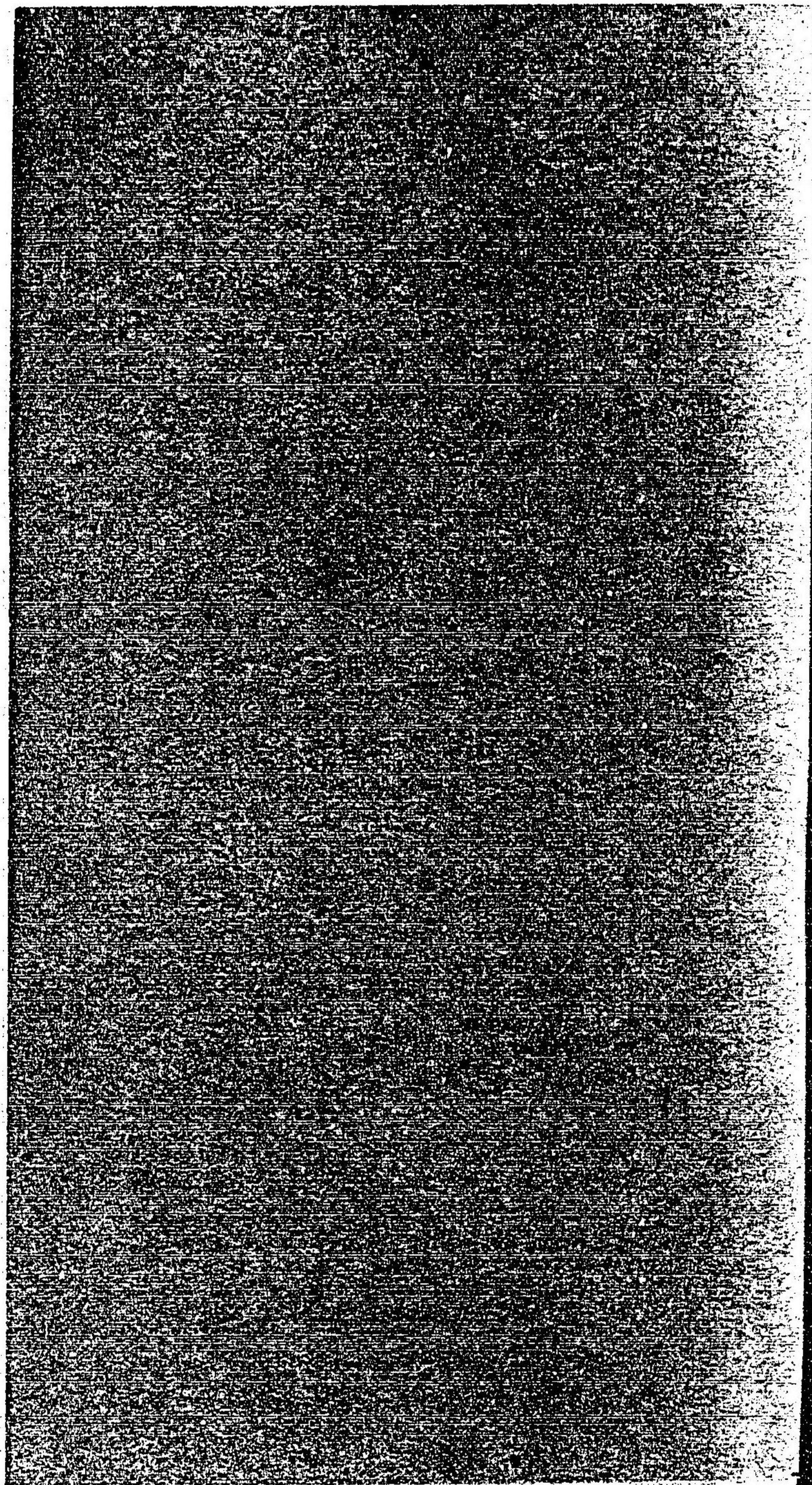
小林 桃園

自序

朝夕感じたる事及び今日迄讀み終へたる書中にて今に尙ほ其の記憶
に新たなるものを集めて人情百話と題す、かくさずに云へば實は已
れの學問にはあらずして先人の學問也、先人の思想也、只其の語を
代へ其の容ちを變じ聊かこれを新たに料理したるに過ぎず故に其功
の如きは心に求めず只少しきにても人心に響く所あれば以て自ら足
れりとなす讀者深くなこれを答め給ひそ。

明治四十五年二月廿一日

著者 識す



人情百話目次

これが人情	一
花にも飽く	一
重成の妻	二
榮華は夢	三
元忠の横取り	四
楠正成曰く	四
勞せずして得るもの	四
一方は苦し	五
禽鳥も欣々	五
八方美人	六

忘るべきを忘れず	六
人の常	七
捨てて置け	七
これ道の極	八
捨てずに置けば	八
軽信輕疑	九
王公と乞食	九
偉人は常	九
正行と内侍	〇
山と水	一
色慾	二
親心	二

怨みは必ず報ゆ	三
水にあらず山にあらず	三
恐れて謹め	四
劍の上を歩む	四
愛嬌の徳	五
私は泣いた	五
才不才の間	六
山陽の知行合一	六
富と徳	七
道心生ず	七
出過ぎぬ様	八
大丈夫	八

顔見て惚れる	一九
眉の曰く	一九
奇言と奇行	二〇
クソ虫同様	二一
本性はかくされぬ	二二
已れを計りて人を計らず	二二
わが身のかなしさ	二三
頼み難きは我が心	二四
闇から闇	二五
云はぬが勝ち	二五
無窮の受用あり	二六
信玄の家訓	二六

雀と鶯と時鳥	二七
口は利巧	二七
死にたくない	二八
無愛想は利己的	二八
致知の工夫	二九
心しだい	三〇
恃もしい女	三〇
蘆の葉にも	三一
良心にも皮あり	三一
心に於て着々	三二
四種の受法	三二
親は子の爲にかくす	三三

自ら美とす	三三
失戀の男女	三四
夢に逃げまはる	三四
冗語の中に	三五
多惡を招致す	三五
英雄の心事	三六
お前の着物は短い	三七
一見直ちに親しむ	三七
時宗の臆病	三八
ウント加法を行ふ	三八
事は密を以て成る	三九
際限なき苦海	三九

偽りと思ひながら	四〇
長壽の秘訣	四〇
大人の生涯	四一
人をもみ渡し渡して	四一
枯るるも同じ	四二
人や眞に智也	四三
世の中は六つかし	四四
情理合せ至る	四四
よく云へり	四四
勝手な話し	四五
自然の教訓	四六
蟬の妻	四六

情は自然にまかせよ	四七
飯と掛物	四八
経験以外に思ひ遣る	四八
掛直あり	四八
表面の尊敬	四八
時頼と横笛	四九
損から損	四九
人で暮らせ	五二
見ずに云ふな	五二
形氣を以て事を用ふ	五三
個人的で社會的	五三
雲泥の差	五四

金と膽	五五
大盜の四徳	五五
浮世の常	五六
星様は若い	五六
片びいき	五七
心和氣平	五八
子も親を思ふ	五八
明すまいがや	五九
他人の方寸	六〇
ごうした者か	六〇
禮を知れ	六一
吾人の心境	六一

心情の爽快……………六二
着物に表はる……………六二
不平家の常……………六三
余は馬鹿……………六三
只金あるのみ……………六四
達と寛……………六四
花は花……………六五
温和外に表はれて……………六五
弱きに同情……………六六
一仰一俯……………六六
問ひ詰むるな……………六七
有徳者は熟睡す……………六七

六容……………六八
御用心……………六八
幅をかく……………六九
親類には欲しくない……………六九
男女の間……………七〇
實は借金……………七一
樂翁公書齋の銘……………七二
山陽の眞摯……………七二
恐しきは誤解……………七二
心體は天體……………七三
未だく……………七三
可愛さ余つて……………七四

古人の糟粕……………七四
 云はぬが勝ち……………七五
 人を釣る法……………七六
 徳は和也……………七六
 楊震の四知……………七七
 只恕あるのみ……………七八
 化け比べ……………七八
 必ず和す……………七八
 互に示す……………七九
 大小高下……………七九
 ズンと飛べ……………八〇
 教へ難し……………八〇

慢心の致す所……………八一
 物体ぶる奴……………八一
 雨が横にふる……………八二
 矢張り豪い……………八二
 一寸先きは闇……………八二
 衆異と眞理……………八三
 味ある言……………八三
 獨り立ち……………八四
 已れに随ひ行くは……………八四
 言輕ければ……………八五
 片角に押し込む……………八五
 自我實現と治善……………八六

少しきの腕……………八六
 吾人の通弊……………八七
 腕のなき奴……………八八
 よく善言を聞け……………八八
 意識ある誇張……………八八
 私も其通り……………八九
 青年の通弊……………八九
 あら恐し……………九〇
 馳走が少ない……………九一
 已れは豪い……………九一
 それが人情……………九二
 善根を植ゑ難し……………九二

下葉は青し……………九三
 斯かる人に注意……………九四
 得たりがほ……………九四
 余年幾何もなし……………九五
 おかしき心……………九五
 辯は黙に如かず……………九六
 我の強き人……………九六
 自らめりこむ……………九七
 出た〜……………九七
 即時斷行……………九八
 むつかしい所……………九八
 口と心は他人……………九九

自ら選べ……………	九九
娘に似たり……………	一〇〇
善は善悪は悪……………	一〇〇
心の衛生……………	一〇一
性質の表徴……………	一〇一
成功の堂……………	一〇二
治心修心……………	一〇二
五指即ち一手……………	一〇二
遂には表はる……………	一〇三
眞の文學者……………	一〇三
家康の用意……………	一〇四
敬遠……………	一〇五

あの人は……………	一〇五
其徳全し……………	一〇六
大怪物……………	一〇六
思ひ切れ……………	一〇七
静観……………	一〇七
廣き世界……………	一〇八
記者に望む……………	一〇八
獨身……………	一〇九
已れの才……………	一一〇
分は常なし……………	一一〇
吳臨川曰く……………	一一一
道の歩き方……………	一一一

米の花……………	一一一
神になるな……………	一一二
親和の至り……………	一一二
精誠の至り……………	一一二
人生最も苦しき所……………	一一三
愚の極……………	一一三
天地の大……………	一一四
澁柿を見よ……………	一一四
學を銜ふ……………	一一五
自適……………	一一五
死後に彰はる……………	一一五
短氣は損器……………	一一六

水なる哉……………	一一六
金言より實行……………	一一七

人情百話目次終

附録目次

母に代りて魔城の女學生に與ふるの書	一
春興漫筆	一二
魔城漫録	一七
私の好き嫌ひ	二三
涼み日記の一節	三二
男も悪いが女も悪い	三四
ニコく主義	三五
春心	三八
歳晚小品	三九
附録目次終	

人情百話

白菊生 著

●これが人情

さる家に美しき娘ありしが或日二人の縁談申し込み者あり然るに二人の内一人の男は顔は美しけれども家貧しく又他の一人は家は裕かなれども顔至つて醜くし所謂玉に瑕にて何れも各々其一方を欲げり是に於て母はしばし躊躇ひてありしが、ここぞ娘の分別時と思ひ定めて娘を呼び斯くと語りて其決心を促したるに娘の曰く

「お母さん私は晝は金持の内に行き、夜は好い男の方に参ります」

●花にも飽く

久しきは花にも人の飽くぞとて

心早くも散る櫻かな

さてもく時を得たる者かな、人は三日見ぬ間の櫻かなと悲め

ども吾れは却つて其時を得たるを喜ぶ者なり。

あゝ飽き易き人心、飽かれぬ先きに散れ櫻飽かれぬ先きに散れ

紅葉

いざさらば思ひ立田の薄紅葉

人の心に飽きの來ぬ間に

●重成の妻
一樹の蔭、一河の流れ是れ他生の縁と承り候にこそ、そもおとせの頃よりして借老の枕をなして只影の形ちに添ふ如く思ひまゐらせ且つ思はれまゐらせ候、此の頃承り候へば此の世限りの

御催しの由かげながら嬉れしくまゐらせ候楚の項王とやらんは世に猛き武夫なれども虞氏の爲めに名残りを惜しみ木曾義仲は松殿の局に別れを嘆くとやら去れば世に望みの窮りたる妾が身にてせめては身の存生中に最後を遂げ死出の道とやらんにて待ち上げ奉り候必ずく秀頼公多年海山の御恩御忘却なき様ねがひ上げまゐらせ候あゝめたたくかしこ。

重成の妻は矢張り重成の妻なり其やさしくして雄々しき所とても今時の婦には得て望むべからず思へば重成の勇其一班は妻の賜なりし也。

●榮華は夢

ほむる間もほめらるる間も花火哉。

櫻は春に飾れども三日の後に憂ひあり、紅葉は秋に飾れども時

雨に散り行く哀れありこれを思ひ彼れを思へば四時花咲かで静なる柳こそ眞にわが心には叶へ。

●元忠の横取り

家康も元忠も面白き男かな、家康織田信長と武田氏を亡し馬場信房の女の美なるを聞き元忠を遣りて其女を収め來らしむ然るに元忠自ら取りて家康に奉らず家康もおかしかりしにや又是れを咎めず、己れの心を推して元忠の心を思ひ遣りしにや。

●楠正成曰く

小督の局云へり言語奇を好むは其人の不正なるを示すもの也人の言は常ならん事を要す苟も其奇なるを欲せずと又楠正成は曰く珍事には誠少くなしと。

●勞せずして得るもの

或人問ふて曰く世に勞せずして得るものありやと答へて曰く貧即ち是れなりと又問ふて曰く世の中に古くしてよきものありやと其人答へて曰く酒と友は古き程よしと。

●一方は苦し

勝負事は必ず自ら求めて爲すべからず己れ勝てば人苦しき也人の嬉しき時には己れ又苦しき也。

勝負事は総て戦争也殺しては楽しみ殺されては又悲む故に古の人勝負事を戒めて曰く

巧を以て力を闘すものは始め陽に始り常に陰に終る甚だ至れば即ち奇巧多しと。

●禽鳥も欣々

古語に云へるあり天地の氣暖かなれば即ち生じ寒なれば即ち殺

す故に性氣清冷なるものは其受享も又薄也只和氣熱心の人其福亦深く其澤又長しと又曰く疾風怒雨には禽鳥も戚々たり齊月光風には禽鳥も欣々たり見るべし天地一日も和氣なかるべからず人心一日も喜神なかるべからずと。

●八方美人

眞骨頭あるものは時流に媚びず世俗を迎へず自信を以て事に當り斷々乎として思ふ所を行ひ其云はんと欲する所を云ふ只金と名譽のほしきもの常に八方美人となりて四方に轉び時流に媚び世俗を迎へんと欲す咄々八方美人夫れ國の爲めに何んする者ぞや。

●忘るべきを忘れず

人の過誤は責め己れの過はこれを顧みず即ち其恕すべきを恕せ

ずして其恕すべからざるものを恕す又人の悪行は忘れずして己れの悪行は忽ち忘る即ち其忘るべきを忘れずして其忘るべからざる者を忘る禍の集り来る所以也。

人は皆前に目がつき後には

耳が屏風をたてまはしけり

●人の常

老子曰く、飢ゆれば附き飽けば即ちあがりあたたかなれば則ち趨り寒ければ棄つ人情の通患なりと。

●捨てて置け

浮世は斯うしたものと諦めて善きも悪しきも鏡なりけりと思ひ過すこと此上の徳はなし是れ又一是非彼又一是非とは哲人の教ふる所斯く思ひ來れば世の中の事を一々是非して咎めたくはな

し。

善きも悪きも一つに丸め

紙に包んで捨てて置け

●是れ道の極

人に對しては和にして寛已れに對しては恭かつ嚴下に對しては慈にして愛、友に接しては忠信即ち對す斯くの如くなれば人を失はず已れを損せず下の怨みを買はず友の信を失はずと至言也

●捨てずに置けば

落ちた木の實を捨てずに置けば

何時か芽の出る時が来る

人も一度位落ちたりとて直ちに殺すべからず、すべからく起して助け置くべし春來なば花咲く事もあらん悔みて悟らば香ひを

放つ事もありなん一度二度の過は神さへ免れ難きものなるぞ。

●輕信輕疑

友は失ふて始めて其眞價を知り松柏は後れ凋みて始めて其操あらはる人は初對面ほどよくはなし又七度疑ふ程わるくはなし只慎むべきは輕信輕疑即ち是れのみ。

●王公と乞食

釋迦一度摩迦陀國に至るや國王太子の大才を愛して之を止めんと欲し國を裂いて太子に與へんと欲す太子答へて曰く一度世の權力に走らば百憂は直ちに來りて其人を懊惱の中に投せんと且つ又曰く死せる王公と死せる乞食と何の撰ぶ所かあると。

●偉人は常

或人偉人を訪ひ歸り來りて曰く朝夕の座作進退には何處にも偉

な所は存せずと其偉ならざるが即ち偉也偉人は常を失はず又奇行を求めず然るに小人却つて偉ならんと欲して好んで奇言奇行を演ずニセ偉人にあらずして何ぞ古語によく俗を脱するもの即ち偉也作意に奇を尙ぶものは偉となさずして奇となすと。

●正行と内侍

と、も、世、に、永、ふ、べ、く、も、あ、ら、ぬ、身、の、
か、り、の、ち、ぎ、り、を、如、何、で、結、ば、ん、

高野武藏の守師直辨の内侍を見染め家來を遣はし奸計を以て是れを奪ひ來らしむ正行吉野參宮の道に是れと遇ひ即ち助けて家に歸らしむ、

内侍は俊基の娘也、才ありて顔容いとめでたく所謂才色兼備の女なりし也、其後天皇内侍を正行に給はんとせし時内侍の心や

如何なりけん、内侍も命の恩人なれば定めて否とは思はざりしならん否却つて正行の優しき心に思ひを寄せしやも知るべからず、然るに正行はそを辭し奉れり、哀れなるは内侍の心也、げに氣高きは正行の心なりけり、

むざんや正平四年正行四條殿の戦に死を遂ぐるや内侍は緑の黒髪フツツと斷ち切りて正行の菩提を吊ひぬあなあはれ、

●山と水

余や山水を愛す、山を愛するは静かなるが爲也、水を愛するは動くが爲也、山や高うして足を低きに置き水や高きより湧いて而かも低ふ流る、山や時に鳴動して地を動かし水や時に大波を起して天を蹴る、山や雨風に遇へば却つて其青さを増し、水や物に遇へば忽ち形を變じて流下す、又山が天を衝いて其高きを

示せば水は海となりて其廣きを示し互に相對して而かも争はず、二つながら以て天地の大を爲す。

●色慾

古人云へり、色慾火の如く熾なるも一念病に及べば便ち興寒灰に似たり、名利飴の如く甘きも而かも一念死地に想到すれば便ち味嚼蠟の如し故に人常に死を憂ひ病を慮らば亦幻業を消し而して道心を長ずべし。

●親心

父は歩いて行けと云ひ母は車より行けと云ふ、父の言や智より出で、母の言や愛より出づ反對の言なれども子を思ふの情は何れもかはる事なし、眞に有り難きは父母の恩愛なり、靜縁法師の歌に

先き立たん事をうしとぞ思ひしに

後れても又かなしかりけり

●怨みは必ず報ゆ

語るなど人に語れば其人も
又語るなど、語る世の中

人の悪事に對する人情云ひ得て切なり、古語に、『人の恩を受くる深しと雖も報かず、怨みは即ち淺きも又報ゆ、人の惡を聞く隠ると雖も疑はず、善は即ち顯はるるも亦これを疑ふ』と吾人夫れ心せずして可ならんや。

●水にあらず山にあらず

世の中の事を猿にかこつけて、見ざると云ひ聞かざると云ひ又は、かかはらざるをまさるなりけりと歌ふ皆是れ人情の轉變極

りなきを慮つての云ひ草なり、思へば思はざるがよく交じらざるが肝要にしてかかはらざるが知者と云ふべし、白居易が『行路之難は水にあらず山にあらず、只人情反覆之間にあり』とは真に夫れ味ある言ならずや。

●恐れて謹め

譽むるものよく其實を過すは情熱すれば也、誹るもの又よく其真を誤るは情冷かなれば也、多く静は熱に勝ち、熱は又よく吾が身を焼盡す夫れ恐れて謹まざるべけんや。

●劍の上を歩む

負けて憤り憤りて害心を起す人情也、故に人は時に恥をさらして徳をとり一步を譲りて徳を養ふの要あり何時も勝氣一べんに遣り通すは恰も劍の上を歩むが如し。

●愛嬌の徳

智なくとも愛嬌あれば人近づき藝なくともしほらしければ人これを愛す、才を愛せずして顔を愛するは人情也、故に女は髪もめでたく着物の色合にも注意せざるべからず、殊更に飾れどにはあらねども袴も青黒よりは海老茶がにぎやかなり殊にしほらしき女の海老茶つけたるはこよなく慕はし。

●私は泣いた

深く人を頼む事なかれ、浅く人を見る事なかれ、深く人を頼めば失望する事多く浅く人を見れば過つ事多し。

吾れ度々深う人を頼みて失望せし事多く浅く人を見て誠を語り泣いて悔ひたる事多し、思へば深きが如くにして浅きは人心也、浅きが如くにして深きも又人心也。

沈々不語の士に遇はば且く心を
輸す勿れ、悻々自ら好するの人
を見れば將に須く口を防ぐべし、

●才不才の間

自ら功を求めず過ちなきを以て功となし常に才不才の間に居る
べき也とは古聖賢の戒むる所也、

昔混沌と云ふ者あり目なく鼻なく、耳口元より備はらず或人之
れを哀れみ口耳鼻目を開き與へしに忽ち絶命せりと云ふ、才を
振りまく事の危険なるを戒めし也、

●山陽の知行合一

頼山陽の外史を著すや友に伴はれて易行院に至り史稿を法海に
示す、法海時に書を読む友の山陽を介するや法海徐ろに口を開

いて曰く、聞く久太郎なる者京にあつて酒を飲み其母を顧みず
而して忠臣楠氏の傳をものす、今不孝人にして忠臣を傳す、楠
氏知るあらば必ず之れを屑とせざらん、余もこの不孝人を見る
事を好まずと、又書を読む事始めの如し、山陽大に恥ぢ出でて
曰く真に一宗の學頭也と、友曰く知行合一夫れ今の時にはあら
ざるなきかと、山陽即ち行季を整へ愴惶郷に歸りて母を省す、

●富と徳

富は徳によりて得、徳によりて保ち、徳によりて益々光を發す、
徳によりて得たる富にあらざれば尊からざる也、徳によりて保
つ富にあらざれば其産も又恒なき也、然るに世には徳を去つて
只富のみ求めんと欲する人あり真に夫れ危ふからずや。

●道心生ず

病にあへば名利を忘れ、一念死地に想到すれば自ら道心生ず、誰れも病時にはよく仁者となり死際には又よく慈善事業に金を投ず、此處に於てか宗教に於ては病時を以て發菩提心の好因縁となし、聞法省察の好時機となす、悟れ世の人釋迦の教理に此念の多き因由を。

●出過ぎぬ様

諸事遠慮致し随分く出過ぎぬ様又利巧がましく問はず語りなごして多く物云ふまじき事。

平凡なれども意味深長也、すべて世の中は遠慮ある人に福來り高慢なる人に禍集るいつもひかへ目にして人近く言葉すくなくして慈悲あれば人の尊敬を受くる事うたがひなし。

●大丈夫

孟子曰く天下の廣居に居り天下の正位に立ち天下の大道を行ふ、志を得れば民と與に之に由り志を得ざれば獨り其道を行ふ、富貴も淫する能はず、貧賤も移すあたはず、威武も屈する能はず之れ是れを大丈夫と云ふ。

●顔見て惚れる

惚れ合ふと云ふ事は、美点のみを見ての事なり、裏の欠点まで見てからの事にはあらず故に月日経てば互に欠点見わすきて厭味を生ずるもの也、兎角惚れたる目には、痘痕も笑くぼに見ゆるとかや、故に欠點は人の横目を借らざるべからず、しかせざれば必ず破鏡の嘆あるを免れず。

●肩の曰く

顔面の諸器互に尊卑を争ひ、口は鼻を詭りて曰く余は是れ身體

活動の源たる食物攝取の用をなし至重至要たり然るに汝は何の爲す所なくして余の上に位す、當に下るべしと鼻肯せずして曰く吾れなくば汝は糞尿をも嘗むるなるべしと更に眼に對して之れを誇り且其上位に在るを責む眼の曰く吾れなくば汝他物に衝突するを免れざるべしと依て以て眉を詰る眉の曰く吾れなくば顔色殆んど形をなさざるなりと。

●奇言と奇行

老子曰、希言自然、故飄風不終朝、驟雨不終日、孰爲此天地、天地尙不能久、而況於人乎。

希言は奇言にあらず道を述べたる言葉なり、見ずや飄風の朝を終へざるを、驟雨の日を終へざるを、天地も尙其奇は久しく保つ事能はず、然るに小人よく奇言を好み奇行も欲す、永續せざ

る所以也。

●クソ虫同様

我等娑婆の縁つき無爲の都に赴き候、出家に成り給ひ佛性の見を磨き、其眼より我等地極に落ちるか落ちざるか不斷添ふか、添はざるかを見玉ふ可し釋迦達磨をも奴となし玉ふ程の人に成り玉ひ候はゞ俗にても苦しからず候、佛四十年說法し給ひ遂に一字不説と宣ひし上は我れと見我と悟るが肝要に候何事も忘念するなかれ、あなかしこかへすくも方便の説をのみ守る人はクソ虫と同じに候八萬の諸聖經を讀みても佛性の見を磨かずば此文程の事も解し難かるべし。

これとてもかりそめならぬ別れては

かたみとも見よ水莖のあと

一休が母は矢張り一休が母なり。

●本性はかくされぬ

人の性は言葉に出で、着物にあらはれ、所作に移り、酒に飛び出す事多し、由來人の本性は、包んでも隠されず、偽つても致し方なきもの也、更に人の氣は、書にあらはれ、文にあらはれ、勝負事にもあらはる、又如何によく泣くも其真情より泣くも其作り泣きたるとは直ちに化けの皮をあらはすなるべし。

下に着ても音のかくせぬ紙衣かな

●已れを計りて人を計らず

人は皆何事も已れの經驗より割り出すが常也、水の事をやかましく云ふ人は必ず水を飲みて腹を傷めたる人なるべく、寢巻の事をやかましく云ふ人は又寢巻を忘れて風引にでも犯されたる

人なるべし去れど人によりては水を飲みても、寢巻を忘れても病に犯されぬ人あれば一概には論定すべからず。

余が隣に五つになる娘あり、霜の白う置ける朝池の金魚を見てさぞ寒からんと云ふ吾れ戯れに池より連れ来て火に當せてよと云へば娘金魚を掬ひとらんとす、吾れ驚きて金魚は水を離せば死ぬ者ぞと教ふれば妙な顔して吾れを見詰む已れを推して他に及ぼす恵みの心はうるはしけれども已れを計りて他を計らざるは却つて愛もて他を殺す也。

●わが身のかなしさ

悲しきは我が身也、心に於ては情が勝ち行に於ては口が先んじ、徳に於ては未だ忠怒の道知らず、哀れむべき也。

名を絶ち利を絶ちて憂ひと煩ひとを避けんとすれども尙人の域

を脱する事能はざれば今に捨てきれず、心の中には常に道と物との争ひあり。又西行や長明の傳記を讀みては聊か慾も薄らげども尙恩愛深き母君に絆されてそれも得果てず、迷ひの中に迷ふなりけりとは、誠に我が身の上の言葉かな。

●頼み難きは我が心

頼み難きは我が心也事あれば忽ち動き、事なきも又忽ち動かんと欲す又人は苦みの中に樂みを發見すれども吾れや樂みの中に悲みを發見す、人は此の世を意志にて見吾れや此の世を情にて見る、悲しきは理也哀れに感ずるも無理にはあらざる也、「歡ひも悲みも夕べに來てはあしたに去る哀れ果敢なの浮世かな」是れ偽りなき我が心の發路也、棄恩入無爲の境兼ねてより慕はしとは思へども憂き目を外に見んこと又我れのねがひにあ

らず、嗚呼世を放れんか四恩あるを如何にせん人を救はんか又餘りに涙脆きを如何にせん嗚呼思へば今の我が身誠に浮草にも似たるかな。

●闇から闇

無量壽經に曰く、善人は善を行ふて樂より樂に入り明より明に入る、惡人は惡を行ふて苦より苦に入り冥より冥に入ると。

●云はぬが勝ち

云ふてもよし云はでもよしと思ふ事は云はぬがよし、自他に益なき事は又辯せぬがよし、損にならぬ限りは負くるがよし又よき事をききても悪しき事を聞きても其よし悪しは直ちに云はぬがよし只月日の明すにまかせ置くべし。よしあしは云はぬがよしはよしの花

あしはあしにて咲き出でにけり

●無窮の受用あり
人の詐くを覺つて之れを言にあらはさず人の侮りを受くるも之れを色に動さず、此中無盡の意味あり又無窮の受用ありと言や真に切。

●信玄の家訓

武田信玄の家訓に曰く、心に物なき時は體豊か也、心に我慢ある時は愛敬を失ふ、心に慾なき時は義理を行ふ、心に私なき時は疑ふことなし、心に驕りなき時は人を敬ふ、心に誤りなき時は人を畏れず、心に貪りなき時は人に諂はず、心に怒りなき時は言葉和かなり、心に勘忍ある時は事を調す心に曇りなき時は静かなり、心に勇ある時は悔ゆる事なし、心に迷なき時は人を

咎めずと。

●雀と鶯と時鳥

人雀を愛せずして鶯を愛す、雀の聲や舌より出で鶯の聲や肺より出づ、更に時鳥の聲には哀れを感ず情切なる者存すれば也、人は言に伏せずして誠に伏す、更に愛情には悦服す暖きもの存すれば也。

●口は利巧

出来る丈よきものを着、出来る丈善き物を食ひ、出来る丈遊びて又出来る丈樂をなさんと欲す、たかしけれども人の願ひ皆此處を出です。否我れは働く爲に生れたり否吾れは好んで苦を求む否奮闘は人生の眞意義なりなどホラ吹く人あれども。若し彼等に向ひ働くは何の爲か、苦を求むるは何の故ぞ奮闘するは何

の爲ごと問はゞ必ずや答へに窮せん。

●死にたくない

死際には矢張り「死にたくない」と云ふが人情にして又自然也、否斯くありてこそ哀れは一入まさるものなれ。

元より人生に於て最も美なる事は臨終の美なるには相違なければども殊更に情を抑へて立派なる豪語や辞世詩を残さんとは吾れの望む所にあらず、余は此点に於て資朝郷や俊基朝臣の辞世詩には哀れを寄するも蜀山人や水野十郎左衛門の辞世詩には同情する事能はず、去れどこは余が一個の私見に過ぎず、世の人如何にや。

●無愛想は利己的

利他の念ある人は同情心ありて愛想に富む、古語に無愛想は一

種の利己的徴候なりとあり。

又愛語と云ふ事あり、常に人に接して愛語を放つ慈悲ありて同情心ある所以也と由來利他心に富める人は、なにがなして人の世話を焼き、同情心ある者は又人が知らぬ顔してゐても自ら呼びかけて愛語を放つ事多し。

又思へ途上にても黙つて通る人よりは「今日は」と云つて過ぎ行く人がよく、「今日は」と云つて過ぎ去る人よりは又「今日はどこにいらつしやいますか、いや御閑の時はどうぞ」と云て過行く人が如何にも慕はしく且つ又己れも一入愉快を感じるにあらずや。

●致知の工夫

具原益軒の五常訓に云へり人の博學にして道を知らざるは思の

工夫なければ也。思は致知の工夫に於て最も益あり。思ふにあ
らざれば自得する事難しと。

●心しだい

苦しき日は長く樂しき日は短し、待つあるの日は長く待たざる
の日は又短し、人待ち程長き者はなしとはよくも云へるものか
な、

思へば長短はわれにありて日にあらず、心擾なれば月日自ら擾
に、心閑なれば月日又自ら閑也。古歌に

世の中を四尺五寸になしにけり

五尺のからだ置き所なし

●恃もしい女

女にして体操を好む者は女らしき女にあらず、又唱歌を好む女

に浮きたる者多く英語を好む女には、ハイカラ多し、然り而し
て獨り裁縫を好む者は將來家婦として最も恃もしい女也。

又性質にも色々あり、無口にして執念深きもの、謹み深くして
すなほなる者、多言にして而かも嫉妬心あるもの、一々數ふるに
違あらず、而して其最も人に愛せらるゝ者は愛想あり且つ言葉
少くして誠ある女即ち夫れ。

●蘆の葉にも

ひもしき時は食を思ひ強壯なる時は名を思ふ。病の時は醫を思
ひ死際には又神を思ふ、思はぬと云ふは偽り也たかざりなり。
見よ溺れる時には蘆の葉にも縋るにあらずや。

●良心にも皮あり

正しき事を直ちに正しと云ひ、悪しきことを又直ちに悪しと云

ふは處世の要訣には非らざる也、又人情を解するものなすべきことにも非らざる也、至徳を論ずるものは俗に和せず、人の良心にも皮が、かぶり居れば其心せざるべからず。

●心に於て着々

柿如何に已れの味の美なるを説くも、人は熟するまでは手を出ださず、韓信將來に報恩を誓つて却つて賤婦に笑はる、故に人は現在を語り暮し心に於て着々大ならんことをつとむべき也。明日の天氣は誰も斷言はせられず。何事も人なみになれと云ひながら天下をとりたる、秀吉それ眞に偉大ならずや。

●四種の受法

樂は苦の種苦は樂の種なる事は一般的理法なれども世には此規

を逸して悲運に泣くもの少からず、故に世尊教へて曰く

世間に四種の受法あり如何んか四となす或は現に樂なるも當來に苦難を受くる人あり或は現に苦にして當來も又苦難を受くるあり或は現に樂にして當來も又樂報を受くるありと、吾人夫れ此の覺悟なくして可ならんや。

●親は子の爲にかくす

葉公孔子に語つて曰く吾が黨に身を直くする者あり、其父羊を盗み子これを証せりと、孔子曰く我が黨の直きものは是れと異り、父は子の爲に隠し子は父の爲に隠す直き事其中にありと。

●自ら美とす

陽子宋に行き逆旅に宿す、逆旅の人妾二人あり其一人は美にして其一人は甚だ惡也然るに其の美なる者賤められて其の惡なる

者却つて貴まる是に於て陽子其故を問ふ、逆旅の小子曰く其美なる者は自ら美とす吾れ其美なるを知らざる也、其の悪なる者は自ら悪とす吾れ其悪なるを知らざるなりと、陽子弟子を顧み謂つて曰く汝等是れを記せよ、行賢にして自ら賢とするの行を去らば安くに往いてか愛せられざらんやと。

●失戀の男女

失戀の女を娶る勿れ、失戀の男に行く勿れ、失戀の女失戀の男共に心は死して已に愛の光は消ね失せたる也、悲みあつて樂みなき也。末は破鏡の嘆あるのみ。

●夢に逃げまはる

男子子を生むを夢みず、女子妻を娶るを夢みず、心に念せぬ事や身になきことは余り夢みるものにあらず、故に臆病なる人は

多く逃げかくれすることを夢み勇敢なる人は物を追ひまはして屢々これを捕にすることを夢む、元より夢なれば斬られても噛みつかれても生死には差支へなければ吾人はそれさへ尙逃げかくれす如何で眞劍の此世に出で、誠の鬼を虜にすることを得んや咄々。

●冗語の中に

常に冗語を吐き常に諧謔を弄する人は時々冗語の中に實語を交へて人を諷する事あり、元より人の事は責むべきにあらねども其己れに關するものは自ら感知して鏡とせざるべからず、酒中の言と雖も我が行に關するものならば尙醒時と心得て我が身を顧みざるべからず、是れ己れを高うする所以なり。

●多惡を招致す

多言は數々窮し、多情は屢々逸す多忙却つて已れを益し、多閑却つて已れを損す更に恐るべきは多才也多慾也、多才は多災を招き、多慾は多惡を招致す心すべき也。

●英雄の心事

南洲翁曰く、命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は仕末に困る此仕末に困る人ならでは艱難を共にし國家の大業は成し得られぬ者なりと。

思ふに彼の大業を成就したるは早く已れを棄てたるに在り、名位二つながら忘れたるに在り、己れを捨てて此處に始めて勇氣出で、名位二つながら忘れて此處に始めて正道生る、西郷の西郷たる所以實に此處に存す、今の朝夕名利に齷齪たる者如何で翁の心事を解するを得んや。

●お前の着物は短い

木戸孝允嘗て事を自邸に議す、然るに西郷來らず、此處に於て孝允使を遣りて早く來會せんことを乞ふ、西郷時に着物を洗ひ裸体の儘にて机に向へり、使の到るや、西郷の曰く、着物なし乾ぐまで待てと、使急ぎ歸りて此由を白す、孝允即ち送るに美衣を以てし再び速かに會せんことを求む、然るに西郷到れば事已に決す西郷笑つて曰く

『お前の着物は誠に短い予へ』

●一見直ちに親しむ

或人曰く、優美性の第一の徳は親切なり、此徳は懇篤なる心より出づるものにして顔面に温雅の容を示し人をして一見直ちに親しむ、又曰く親切なる人は質朴にして同情に富み満面笑みを湛

にて氣六箇敷容ちなしと、

●時宗の臆病

北條時宗幼時甚だ臆病也、或日私に謂らく若し余にして此の病を治せずんば以て世に立つ能はずと。是に於て兼ねてより尊信せる寺僧を訪ひ來由を告げて其道を問ふ然るに寺僧大に叱して曰く、汝の臆病は汝の心より來る、汝自ら之れを取り去る事能はずんば、誰かよく之れを取り去る者乎汝の愚又極れりと、時宗耻ぢて家に歸り是れより大に道を修す。

●ウンと加法を行ふ

英國のアデソン曰く、吾人が日々云ふ事の十分の九は皆人の惡口なりと、兎角人の惡行には利子をつけて吹聴し、善事はアベコベにウンと加法を行ふて話すが常也、百の善業も一の惡事に

よりて其功を奪はれ君子徳高ふして忽ち誹り起る、げに恐ろしきは人心也げに謹むべきは人の惡口なりけり。

●事は密を以て成る

古人戒めて曰く、夫れ事は密を以て成り語は泄すを以て敗る、未だ必ずしも之れを泄すにあらざる也、而して語其匿す所の事に及ぶ是くの如きもの身危しと。

●際限なき苦海

佛者曰く、人生の事一として苦ならざるはなし、生も苦也、死も苦也、病も苦也老も苦也欲する所の者常に得がたく欲せざる所のもの愈々近く生者必滅會者定離昨友今仇、父母妻子の愛も終には別れざるを得ず、一切事物無常にして苦惱常に之に纏綿す、此世は實に際限なき苦海也と。

●偽りと思ひながら
偽りと思ひながらも譽めぬれば
ほめぬ誠にまさりぬるかな

人は妙なもの哉偽りであつても譽めらるれば嬉しく、誠にても苦きことを云はるれば腹立たしき心地す、身を敗るも之が爲也、己れを失ふも之が爲也。

耳中常聞逆耳之言心中常有拂心之事
纜是進德修行的砥石、若言々悦耳事々快心便把此生理存矣。

●長壽の秘訣

長壽の法や數多し、吞氣に暮すは其一也聲色を節するは其二也、機嫌をよくするは其三也、然り而して常に善きものを食ひ早く

寝ねて遅く起くれば即ち命長き事疑ひなし。

●大人の生涯

西哲曰く、凡て大人の生涯は乾々止まざるの生涯なり、彼等は皆貧苦、屈辱の中に半生を過し、世に知られず、世人の爲に誤認せられ、我れに如かざる者の爲に非難せられて半生を過し而して人は眠むるも吾は思ひ人は飲酒に耽けるも吾れは讀書に忙はしく常に自ら永く吳下の阿蒙たらざらんことを誓へり已にして時機一度至るや彼等は忽ち名譽を四方に輝し直ちに前半生の汚衣貶裳を脱ぎ捨てて金衣玉装の身に變すと。

●人をもみ渡し渡して

世の中に湯屋程人を洗ふ職はなく、酒屋程人を酔はせる職業はなし、然り而して又渡守程仁に近き業はなかるべし。

古歌に

人をのみ渡し渡して己が身は

岸に上らぬ渡守かな

●枯るるも同じ

妓王始め清盛に愛せられ西八條の第に獨り其寵を專にす、或日白拍子の妙手佛の來るあり、妓王即ち清盛に勸めて共に其舞を見る、佛時に年漸く十八艶姿恰も花の如し

君を始めて見る時は千代も經ぬべし姫小松御前の池の龜岡にと歌ひ終る今様の一曲

其容姿の清雅にして其聲の妙へなるに清盛はしばし恍惚として已れを忘れしが忽ち戀情を起し其日より彼れの愛は悉く妓王を離れて佛に注がれ、妓王は遂に家を追ひ出されぬ、此處に於て

妓王は熟々人生の榮枯盈虧に感じて此の世を果敢なみ

もね出るも枯るるも同じ野邊の草

何れか秋にあはで果つべき

の一首を殘して身を佛道に歸しぬ、斯くと知りたる佛又善心深き性にやありけん其後は朝な夕なに妓王の歌を思ひ出で、深く浮世の無常を感じ自ら佛の元に至りて祝髮し共に佛道に歸依して一生を終れり。

●人や眞に智也

牛水を飲めば乳となり、蛇水を飲めば毒となると華嚴經にあるは面白し、吾人は此の語を聞きて大に叫ばんと欲す人は何故珍膳佳肴を食ひて糞尿を出すかと否こは余が戯れなり人や眞に知也其物を食するや見る見る是れを己れに化せしめ用なきものは

忽ち糞尿となして尻より是れを放出す人や真に智也。

●世の中は六つかし

世の中は六つかしきもの哉、先きに飛び出づれば頭を打たれ、後るれば又尿を叩かる、さればとて中に居れば又前後よりはさまれて苦しく、横に出づれば又再び歸り難し、然り而して若し一度地に倒れんか手足面部一度に踏まれて再び顔を上げ難し。

●情理合せ至る

或人酒間に説いて曰く『理屈に於て勝ちたる物は負け』と真に然り人は情に於て勝つ術を知れば足れり、情理合せ至る以て天下を動すべしとは至言。

●よく云へり

老子曰、知人者知己者明勝人者有力自勝者強、知足者富強行

者有志、不失其所者久、死而不亡者壽

●勝手な話し

互に色に惚れて居ながら男が捨てたどて女が逃げたどて怨むべきにあらず、色を以て人に事ふるものは色衰へて捨てらることは理の當然にあらずや。

世には女郎買ひをする男にして女郎に誠なしと譏るものありたかしき事にこそ、已れ色を以て對しながら獨り女郎にのみ誠を以て對せよとは余りに人を馬鹿にしたる言ならずや、色と誠とは如何に人よき商人にても、まさか賣り買ひはせざるなるべし。

折り得ても心ゆるすな山櫻

誘ふ嵐に散りもこそすれ

女の心が秋の空なれば男の心も慥に夏の空位はかはる男も女も

夫れよく／＼心せざるべからず。

●自然の教訓

心を静めて物を観れば天地の物一として教訓にあらざるはなし
春は人に樂觀的思想を興へ夏は壮大を、秋は悲觀の念を冬は退
守の想を、又蝶は浮かれ心を、時鳥は物の哀れを諭す、諭すに
は非ざれども諭す様に悟るが尊き也恃もしき人也。

昔道風は蛙の爲に起ち、靈雲和尚は櫻花を觀て悟り、香嚴和尚
は擊竹の聲をききて道を悟りぬ。

思ふに天地自然の萬物を見て理外の理を悟り、物外の物を見る
事は即ち知を致すの元なり、悟れ悟れ夫れ悟の字の吾が心なる
事を。

●蟬の妻

世に蝶ほど浮かれ歩くものはなく、時鳥ほど泣き暮すものはな
し更に雀ほど人事云ふ者はなく、蟬の妻ほど又無口なる者はな
けん。

●情は自然にまかせよ

喜怒色に露さぬ事は吾れの望む所にあらず、去ればとて作り泣
き作り笑ひは又吾れの欲する所にあらず、衷心より嬉しきとき
には躍りて喜び衷心より悲しき時には又涙を流して泣き哀しむ
事吾れは去程たかしも思はず、否斯くありてこそ人情は有り
難きものなれ。

余り早く悟りて神になり、余り高く悟りすぎて仙人的にならん
事は吾れの願にあらず、只吾れは矢張り末永く人にて暮らさん
こそ願はまほしけれ。

●飯と掛物

三浦梅園曰く、學問は飯と心得べし腹に飽くが爲め也掛け物なごの様に見せんずる爲にはあらずと。

●經驗以外に思ひ遣る

行かずして知り未だ來らざるに己に之を察す斯くの如くにして聖賢は能く經驗以外に思ひ遣る之に反し凡夫は頭をゴツツケて始めて成程と悟り思ひ常に我が心を出でず故に已れを知りて人を知らず、己れの樂しみを知りて人を哀むことを悟らず哀れむべき也。

●掛直あり

古人の云へる如く吾人は一方に於ては已れを隠さんと欲し、他方に於ては又已れを彰はさんと欲す故に人の富貴を聞かば其半

ばを信じ常に其言は又其行ひよりウンと掛直のある事を承知せざるべからず。

●表面の尊敬

蔭で賞めらるる人あり、蔭で誹らるる人あり、蔭で賞めらるる人は徳ありて得あり蔭で誹らるる人は損ありて危し。

思ふに人は己れの利益迄捨てて人に忠告するものにあらず、心には飽くまでも嫌ひながら口には却つて其人を賞めそやす事あり又心には飽くまでも慕ひながら口にはそれと云ひ得ぬが人の誠也故に人はよく／＼此處を顧みて徳を研き行ひを慎まざるべからず。

世に只表面のみの尊敬を受くる程恐しき者はなし。

●時頼と横笛

齊藤瀧口時頼と横笛との戀物語り世にも一入哀れに感ずれ。
 時頼一夜西八條の第に開かれし平相國の花見の宴に招かれしが、其夜の舞の舞ひ納めに出でし横笛の白拍子には似て閑雅に藤長けて舞ひ終る春鶯囀、綾羅の袂ゆたかに其婉やかなるに時頼は深くも心を動しぬ、時頼時に年十九横笛時に年十六夫れより時頼の心盡せし文は幾度となく彼れに送られぬ、去れど彼の心は動かざりき、否動かざりしにはあらざる也未だ其機を得ざりしなり。
 噫々六波羅一の武者として小松殿の寵を一身に集めし齊藤瀧口時頼も一度戀にとらへられては樂しき日とては一日もなく彼れは肉落ち骨表れて鬼をも挫かんず昔の面影は何地行きけん其後形もなし。

或日は横笛の舞情を怨み又或時は已れの誠の足らざるかと悲しみしが一夜彼は翻然として悟りぬ、悟りて彼は家を出でぬ家を出でて彼は差俄の往生院に身を隠しぬ、父の許しを得ざりしも其一因ならん横笛の無情なかりしも又其一因ならん、斯くと聞きたる横笛、噫々我れ故にあたら武士に世を捨てさせしかと、心も心ならずせめて一度相見て吾が心の誠を明かし已が罪亡ぼさばやと彼は雄々しくも一人往生院へと訪ね行きぬ。
 然るに哀れや時頼は是れに遇はず且つ謂へらく已に世を捨てたる時頼なれば昔の時頼にあらず、今は世を離れたれば又人の罪さく謂はれなし昔は昔今は今と悟り澄まして心強くも彼は横笛を追ひ歸へしぬ。
 あはれや横笛は又其日より世を果敢なみて黒髪絶ち切り身を佛

道に歸して世をすね通しけるが是非もなき。

●損から損

憎むとて憎み反すな憎まれて

憎み憎くまればはてしなれば

是れを損して又損す、憎み返す事は余り利巧なる人のする仕事にあらず、人は憎むとも憎まじ人は咎むとも咎めじ人は怒るとも怒らじ。

負けて勝つ心に知れや首引に

勝ちたる人の倒ふるるを見て

●人で暮らせ

或人曰く、地の穢き所多く物を生じ、水の清き所常に魚なし、故に君子は常に含垢納汚の量を存し、高潔獨行の操を持すべから

ずと、又曰く、山の高き所木なく而して谿谷廻る所則ち草木叢生すと。

●見ずに云ふな

見届けぬ内は語るな初櫻

人の意を中傷する事勿れ、聞かずして聞きたりと云ふ事勿れ、見ずして見たりと云ふ事勿れ、人の意を中傷する者は多く人を殺し、聞かずして聞きたりと云ふ者は又よく虚偽を傳ふ慎むべき也。

●形氣を以て事を用ふ

或人嘆じて曰く、人情鶯鳴を聞けば即ち喜び、蛙鳴を聞けば即ち厭ふ、花を見れば則ち之れを培はん事を思ひ、草に遇へば則ち之れを除かんことを欲すと嗚呼人は只形氣を以て事を用ふ過

つ所以也。

●個人的で社會的

獨り生れて又獨り穴に入るを見れば人はどこまでも個人的也、又生れ出づると共に人の世話を受け棺に這入るまで人の世話を受くるを見れば又人はどこまでも社會的也、然かも獨り生れたるを以て獨立の精神を養ひ、死ぬまで人の世話を受くるを以て社會的たらんと欲する者あらば余は特に稱して達道の人と稱へん。

●雲泥の差

命までも口には云へど

胸の中では舌を出す

口でけなして心で賞めて

人目恐んで見る寫眞

胸の中で舌出す者と、人目を恐ぶ心とは實に雪泥の差あり。化粧べんつけても好つきやらんとな、たかしき様なれども物は形を以てこれを奪ふ事の出来る者にあらず。

●金と膽

人の心は妙なものかな、其懷に金のある時は肝迄大きくなり、金の減るに随つて肝は愈々縮み行く、旅先きにての肝は尙更金によりて大きくもなり小さくもなる。

或人は持つた心で居れば善いと云へども金を持たずに居ていくら持つた偽ねしたとて心の淋しさは直らず、去れど金をウンと持ちながら持たぬふりする程楽しく又心強きはなし。

●大盜の四徳

或人大盜に問ふて曰く、『盜賊の頭になる道ありやと』大盜答へて曰く四徳を備へざれば能はずと其人笑つて曰く盜賊の四徳夫れ如何なる者ぞやと、大盜即ち謂つて曰く。入るに先んずるは勇也、出づるに後るるは義也、可否を知るは智也、分つ事均しきは仁也、此の四徳を備へずんば遂に大盜たる事能はずと。

●浮世の常

浮草や今日はあちらの岸に咲く

咲いた許りならよけれども、咲いた揚句には此方に向いて嘲けり笑ふ悲しけれども浮世の常也。

●星様は若い

た月様よりた若い証據

た星様には角がある

春の月はたぼろにして角立たぬ所に味があり、酒に酔はせて人を踊らせる所に又圓きを發見すべし、彼の蟻螂の如く角立ちたる人は何時か必ず肩をスリハガれる者なるべし。

去れど人も若き内は皆角あるが常也、谷の石も海に出づる迄は角がツブレず幾度か突き當り幾度か轉ぶ而して後に漸く圓きを得『どの枝も梯がからぬ柳かな』あゝ人も斯くありたきもの哉。

●片びいき

花を見ぬ雁や紅葉のかたびいき

柳櫻をこぎませて蝶の飛び交ふ春の野を見ぬ雁のかたびいきするは誠に理也一方聞きて沙汰するな、世の中は存外思ひ違ひのあるものぞ又何んでも一圖に早合点して物を誤解する事勿れ、

聞いた上にもよく聞きて尋ね探して調べ見よ、そこには必ず道
あらん、そこには必ず徳あらん、誤解されても悔ゆるなよ遂に
は月日の證すあり。

●心和氣平

昔より性燥心粗にして事を急にするものは一事もなるなく心和
氣平にして事を寛やかにすれば巧成り名遂ぐと教ふれども吾人
は露程も夫れが解らず今に性燥心粗也、今に心和氣平を得ず、
悲しむべき也。

●子も親を思ふ

深草の帝に後れ奉りて俄かに出家したる僧正遍照は吾頭髮たる
すとてそがろに父母を思ひ出で涙を流して歌ふらく。

たらちねば斯かれとてしもうば玉の

わが黒髪をなですやありけん

と然こそあるべきものなれ、世には親煩惱に子畜生と云ふ言葉
あり去れどなごか世の中に斯かる人許りある者ぞ吾れ郷を出で
て一入親の有難きを知り父を失ふて又一入父の有難きを知る決
して偽りにあらず、盡せ世の人父ある内に盡せ世の子等母ある
内に。

●明すまいがや

心には浪波の事を思ふとも

人の悪きは云はざるがよき

昨友今仇とは只宗教上の文句にはあらざる也抑も此の世に於て
最も恐るべきは己が真心明けし友の一度ひるがへりて敵となり
たる時也其時に及びて如何に涙を流し臍を咬み、あゝ斯くなる

事と知らばあゝは語らざりしにと悔むとも己に及ばし噫々明すまじきは我が誠也げに云ふまじきものは人の悪口なりけり。

●他人の方寸

分つた様で解らぬは人情也、古詩に云ふ、他人方寸間、山海幾千里、と此の山海幾千里が抑も恃み難く又最も恐しき所なり、噫々山海幾千里、あと山海幾千里。

●どうした者か

吾人はドウした者か少し得意の事があれば世の中が嬉しくて嬉しくてたまらず又少し失望の事あれば又世の中が厭で厭でたまらざる也門馬主筆嘗て余を戒めて曰く情の人は熱すれば逸し冷むれば變ず情の人は實に轉變極りなし、眞に謹しまざるべからずと。

●禮を知れ

人に接するに長幼先後の序を以てする人は徳ある人也更に貴賤の別を知り主従の別をわきまへ尙進んで職務上に於て官長下僚の別ある事を知る者は間違のなき人也而して吾人は只理を知つて長幼の序を知らず權利あるを知つて而して官長下僚の別あるを悟らず誤れるも又甚しからずや古人曰はずや禮を知らざればもつて立つ事なしと。

●吾人の心境

悲しむべきは吾人の心境也、忍ぶべき所にも忍ぶ能はず抑ゆべき所にも抑ゆる事能はず即ち少しも其心に含藏する事能はずして悉く是れを言に發す。故に事は敗れ幸福は自ら離れ去る、あゝ怨むる事勿れ世と人とを其罪は人にあらずして己にあり其の

禍福は決して外にあらずして内にあり。古聖曰く禍福門なし、只人自らこれを招くと。

●心情の爽快

精神の平和なる人は至幸の人也、心情の爽快なる人は又至福の人也、精神の平和と心情の爽快とは已に是れ人間最大の幸福なれば也然して吾人は未だ精神の平和を得ず、心情の爽快を得ず、常に前面の小事件の爲に沈吟し常に人の一顰一笑に心情の爽快を失ふ、眞にたかしからずや。

●着物に表はる

着物の色合や縞柄は人各好き嫌ひありやさしき人は自らやさしき色合や縞柄を好み、ハイカラな人は又自ら華美なる縞柄を望む故に着物を見て其人の心立てもあらまはしは讀まると様也。

其他帽子やステツキに至るまでよく其人の氣質表はる、又帽子のカブリ様にも幾分か解る様也ステツキなどもやさしき人の丸太持てるは殆んど見當らず。

●不平家の常

或人曰く今の所謂不平家なる者は恰も蟹に似たりと、其故を問へば答へて曰く、蟹の其穴中にあるやエラキ顔して泡を吹きブツ／＼怒りて天下は一呑みに呑みさうなれども扱て引き出して見れば腕はなし去ればとて又道は眞直には歩けず、引き出すや否や直ちに横に走り出すと。

●余は馬鹿

噫々此世に於て余の如く愚なる者は又とはあらし功を急いで修養を怠り、人に教ふる事を好んで自ら修むる事を知らず、只一

時の名に迷ひて遠きを忘れ俄か造りの學者たらんと欲す誤れるも又甚しからずや總てまことの力は年を経て出で永き苦みを経て始めて生ず決して一朝一夕にしてこれを待べき者にはあらざる也、咄白菊奴、

●只金あるのみ

廿余年全國を漂流し、あらゆる苦難を嘗め盡して歸り來れる壹人の知己余に語りて曰く、噫々君は道を以て此の世を渡らんとするか未だく君は世を知らざる乳臭兒のみ、知らずやまさかの時には親も頼むに足らず兄弟も頼みにならず、神佛素より頼むべからず頼むべきは只一の金あるのみと。

●達と寛

孔子云へり達とは質直にして、而かも義を好み言を察して而か

も色を見、慮りて以て人に下る邦にありても必ず達し家にありても必ず達すと、又曰く寛ならば即ち衆を得、信ならば即ち人任ず、敏ならば則ち功あり惠ならば則ち以て人を使ふに足ると。

●花は花

總ての人に賞せられ総ての人に歓迎せられ又総ての人に同情を得んと欲する者あらば其は人の心を知らざる者也、一と云へば二と云ひ、善と云へば惡と云ふ世の中何ぞ悉く人の賛同を求むる事の出來得んや、花鳥風月自ら争はずして人これを争ひ、山川草木自ら較せずして人これを較す、故に物の是非善惡は、人にまかせて打捨て置くべき也、而かも花は永久に花たり、草は又永久に草たらんのみ。

●温和外に表はれて

古聖教へて曰く、讓は和の元をなし満は損を招き、謙益を受く、而して喜ぶ時失言多く怒れる時最も失体多し、然り而して温和外にあらはれ自ら卑くして人を尊めば人親まさる事なしと。

●弱きに同情

情けある人は自ら弱きに同情し、慾ありて只權勢を求むるに急なる人は又自ら強きに同情す、余は今此處に其の人品の高下を論ずる譯にはあらねども弱き余は又自ら弱き者に同情する者を好み、強きに同情する者を好まず、昔より賢人も云ふ人を見るの道多くありと云へども其最も必要なるは其下位に對する如何を見るにあるのみと誠に至言也吾人はこれを聞きて密に己か心に耻づ。

●一仰一俯

古人云へり、仰いで山を觀れば厚重遷らず、春秋變化す、雲を吐き煙を飲み巍々として中空に聳ゆ又俯して水を望めば汪洋極りなく、晝夜流注す、波を揚げ瀾を起し怒濤常に天を蹴る、一仰一俯總て教へにあらざるはなしと。

●問ひ詰むるな

物はどこまでも問ひ詰めて其是非を正すべき者には非ざる也、我れこれを是とするも人これを非とす、争へば争ふ程是非混合して明かならず、去れど争はずして其是を知り世の所謂る善とする所を歩まん事は寸時も忘るべからず。

黙して知る是れを智と云ふ。

●有徳者は熟睡す

有徳者はよく熟睡すとあれども此頃は能くは、ねむられず徳な

き印にや。又此の頃は何故にや世を思ひ人を思ひ且つ人生の果敢なきに想到して心は常に定らず殆んど浮雲の空に漂へるが如し笑ふべき事なれども致し方なし、近き内に禪なりと修めばや。

●六容

足の容は重、手の容は恭、目の容は端、口の容は止、聲の容は静、而して顔の容は直にして温なるを尊ぶと名言か。

●御用心

勝つ事もむつかしけれども負くる事も又むつかし、よし小さき事にて人の罪を被て負け居る事は容易の事にあらず、更に利益に負け争ひに負け、名に負けて、静かに道を行はん事は兎ても凡夫のよくし得る所にあらず。

總て勝つ事を好む者は名に走り又よく名に走る人は事々に勝ち

を制せんと欲して露程も負くる事を好まず、退いて誠を盡くす事をつとめず、稍々もすれば只上すべりして名のみ狂ひまはる慎まざるべけんや。

●幅をかく

人は誠に驕り強きものかな。たとへ現在は如何程貧しくとも尙ほ昔の富はこれを語りて誇らんと欲し、又俄かに富める人は昔の貧しかりし事は露程も語らず、即ち己が身に得する事は古きも引き出し、悪しき事は目の前の事も尙これを隠さんと欲す、其他一族の富を肩に持ち、親類の出世を鼻に掛け甚しきは知己の高位にあるを誇りて己れの身に幅をかけんとするものさへありたかしき事にこそ。

●親類には欲しくない

或人云へり「英雄や志士のする仕事を傍で見ているのは善いが、わが兄弟や親類には欲しくない者である」と、よくも云へるものかな、是れあるが爲めに國に盡さんと欲する者は家を離れざるべからず、世に盡さんと欲する者は慾を離れざるべからず。總て國家の利と一家の利益とは常に相反し個人利と公共利とは又多く相反比例す高山彦九郎も楠正成も國の爲めには善けれど、も家の爲めには却つて損あり又吉田松陰や蒲生君平の如きも我が家人としては餘り望ましき人にあらず。

徳は無慾なり

●男女の間

遠くて近きは男女の間也、近くて遠きも又男女の間也、而して世は其近きも遠きも共にこれを疑ふ、彼の爪田や梨下の冠のと

ても比べものにはあらず。昔より君にも此の道を以て屢々疑はれ志士も屢々此道を以て其真心を傷けらる故に君子は危きに近つかず、誠に恐しきは人心也、げに疑はれ易きは男女の間也。

●實は借金

聞く事を恥ぢて問はずんば後に再び羞づる事あるべし、羞ぢを忍びて問ひ置かば後には必ず喜ぶ事あらん。すべて人の思想や學問は皆己れの物にあらず、己れの思想も實は己れの思想にあらずして先人の思想也、社會の思想なり己れの學問も實は己れの學問にあらずして、先人の學問也、社會の學問也、聞きては傳へ、傳へては教ふ、或人曰く大なる學者は大なる負債者なりと。

●樂翁公書齋の銘

白川樂翁公書齋の銘に云へるあり、勤嚴身を保ち、讀書短を廣む、慎交害を遠ざけ知足樂みを享受す而して存厚は福を招致し、寡慾は壽を延すの第一法なりと。

●山陽の眞摯

頼山陽嘗て畫工に命じ己か肖像を畫かしむ然るに畫工は山陽の機嫌をとらんと欲し頻りに飾りて筆を加へければ山陽の曰く何ぞ飾ざるの甚しきや余が容貌は斯くの如からず再び其眞を寫すべしと遂に再び其肖像を畫き直さしむ。

●恐しきは誤解

世にもつれて解けぬ誤解ほど恐ろしいものはない、これが爲めには人も悲しみ己れも悲しむ互に悲みて互に解けず、人にも笑

はれ世にも誹らる切なき事云はん方なし、誤解すな、誤解すな、誤解は人を傷け世を毒すげに慎むべき事にこそ。

●心體は天體

古人曰く心體は便ちこれ天體なり、一念の怒は震雷暴雨、一念の慈は和風甘露、一念の嚴は烈日秋霜なりと、又曰く春は人を暖め、夏は人を盛にし秋は心を靜かにし冬は人を冷殺すと。

●未だく

誹られては怒り賞められてはあがる吾人の通患也。誹られては忍び讚められては耻づ至人の境也、吾等は自ら高慢ぶり而かも好んで人の惡事をあばき出す恐るべき也之れに反し至人は人の咎を隠して善を擧げ已れを省みて謹み深し福の集り來る所以也。

親はよく子に向つてた前の事には一切關係せずと云へども夫れは只口先き計りなり決して真から云ふものにあらず實は可愛さ余つての戒め也。之れに反し他人は萬事出来る丈世話致しますと口にはよく挨拶すれどもまさかの時には其萬分一をも助くる者にあらず親の一切關係せずとは即ち眞の戒めにして他人の萬事出来る丈世話致しますとは只口先の挨拶也、親の言は血より出で人の言は口より出づ、夫れよくよく鑑みざるべけんや。

●古人の糟粕

桓公書を堂上に讀む時に車大工輪扁堂下に輪をけづる椎鑿を釋てて堂に上り桓公に問ふて曰く公の讀む所は何の言となすやと桓公曰く聖人の言也輪扁曰く聖人ありやと公曰く死せり輪扁曰

く然らば即ち君の讀む所は古人の糟粕のみと、桓公怒つて曰く寡人書を讀む輪人安ぞ議するを得んや説あれば即ち可也若し説なくんば直ちに殺さんと輪扁曰く臣や臣の事を以てこれを觀るに輪をけづる事徐ければ甘くして固からず疾ければ則ち苦くして入らず徐ならず疾ならずこれを手に得而して心に應ず口云ふ事能はず術あつて其間に存す、臣以てこれを臣の子に諭す事能はず臣の子も又これを臣に受くる事能はず是れを以て行年七十老いて尙輪をけづる古の人と其傳ふべからざる者と死せり、然らば即ち君の讀む所の者は即ち古人の糟粕のみと。

●云はぬが勝ち

知つて知らざれ見て見ざれ、聞いて聞かざれとはなつかしき言葉也、去れと言ふて言はざれば横着也、吾人は決してこれを學

ぶべからず。

よき事は見聞いても云へ悪しきをば

見ざる聞かざる云はざるがよき

●人を釣る法

余が友に面白き男あり彼れは曰く、人を釣ると肴を釣るとは同じ事也と其故を問へば答へて曰く。肴を釣るには餌先きに針の見わすかぬ様にするが肝要也然かせざれば肴は決して喰ひつく者にあらず、人を釣るにも餌先きに針が見わすきてはだめ也針を隠して水に投じ喰ひつきたる時すかさずピンと竿をはぬれば直ちに慾深き人魚は掌中に入るべしと。たかしけれども又一理なきにあらず。

●徳は和也

人の悲しむ時には悲しみ、人の喜ぶ時には喜ぶこれを徳と云ふ昔より徳は和也と云ひ又は徳は成和の修なりとも云ふ而してこれを修むるに道あり、一は我を通さぬ事也二は大同に合して小異を捨つる事也、三は衆情を汲んで私情を抑ゆる事即ち是れ。

●楊震の四知

昔支那に楊震と云ふ縣知事あり、此人性至つて謹直にして公平無私の人なりしが或夜一人の男來りて一封の金を差出し、是れはほんの寸志也外に知る人なければ何卒御納め下さいと云ふ、楊震屹度容を正し聲をあげまし叱して曰く何ぞ人を過るの甚しきや天知る地知る吾汝又共にこれを知る咄無禮者、直ちに其金を持ち歸るべしと壘を蹴つて怒りしかば彼は全く面目を失ひ悄然として立ち去れり後世傳へ稱してこれを楊震の四知と云ふ。

●只恕あるのみ
己れを推して他に及ぼす、これを恕と云ふ。昔より仁に到るの道は、只恕あるのみと云ふ。恕の字は又愛れむ思ひ遣る、許す、寛假す等の意義あり、思ふに忠にして恕、これ處世の訣たるべきか。

●化け比べ

知つて居ながら口には云はず、騙された賦で人を騙し、騙した賦で又人に騙さる、世の中は狐狸の化け比べとは云ひながらさてきて四十八手の裏表、用心の上にも用心すべき事にこそ。

●必ず和す

古人云へり、來れば即ち迎へ去れば則ち送る、對すれば則ち和す、五五十、二八十、一九十是れを以て和すべし虚實を察し、陰伏を識り、大は方所を絶ち、細は微塵に入る、殺活機に在り

變化時に應じ事に望み心を動す莫しと。

●互に示す

悪人は悪を懐にし賢人は道を懐にす而して又悪人は悪を隠して出し賢人は道を隠して出す、故に一は人を殺し一は人を活す、而して中間の人は二つながらこれを懐にせず互に示して互に相表す、たかしき事にこそ。

●大小高下

小さき事を大きくなす人は心細き人也大きなる事を小さくする人は心の大なる人也世の中は議論によりて小さくもなれば大きくもなる只心の持ち様一つなり而して其小さき事を大きくなす人の心を尋ねれば多くは恕の心なき人也又大きな事を小さくする人は多くは情けありて人を哀れむの心深き人也一は理を知り

一は情を知るこれ人に大小高下の分るゝ所以也。

●ズンと飛べ

南洲翁は我が勇氣の秘訣は己れを棄つるにありと云ひ、ナルソンは大膽なる行爲は却つて安全なりと絶叫す、又或人は云ふ身を棄ててこそ浮ぶ瀬もあれと思ふに世の中の事を一から十迄成功せんと思へば遂に手は出だされず、飛ぶ時は小溝でも思ひ切つてズンと飛べとは善くも云へるものかな。

●教へ難し

西人云へり、人よ汝は千年も生きん心にて居る勿れ死は汝の頭にかこれり爾が生ける間爾の働き得る其間正しき人にてあれど、然るに悲しい哉俗人に死を教ふれば却つてこゝに力を失ひ直ちに悪道に狂奔すげに致方なきは世俗の常なり。

●慢心の致す所

伶俐なる人は時々氣を短かにして人を冷評す、才を恃むが故也、今一つは自負心強きが爲也更に極評すれば己か才を恃む慢心の致す所也、或人は才ありて自信あるものは其所作横柄也と云ふ、去れど吾人は決して斯くの如き人を範とすべからず才あるも誇るべからず自信あるも横柄なるべからず。

●物体ぶる奴

たかしき事を云ひても笑はぬ人と常に、ニコニコして愛嬌ある人とを比較するに前きの人には個人的人物多く後の人には情けある人多きが如し、前きの方は物体ぶり後の人はよく有りの儘に笑ひ興す、吾れ性來物体ぶる事を好まず而して有りの儘に笑ひ興する人を好む、前きの方は重き様なれども吾れは是れを好

まず、後の人は輕き様なれども吾れは却つてこれを愛す世の人は如何にや。

●雨が横にふる

借りのある前では雨が横に降り

雨が横に降る道理はなれども借りのある前では傘を横にさす卑劣の様に見ゆれども實はこれが人情也、貸したる人は又借りたる人よりは記憶強く肩も高しこれが即ち人の情にや。

●矢張り豪い

古人云へり君子は矜にして而かも争はず群して而かも黨せず衆の惡むをも必ず察し衆の好むをも必ず察すと又曰はく恭ならば侮らず寛ならば衆を得信ならば即ち人任すと。

●一寸先きは闇

今宵明日の天氣を賞めて置けば明日は直ちに雨となりて人は笑はるゝ事あり又其日の天氣にても余り朝早く賞め置けば夕方には雨となる事あり世の中は一寸先きは闇也當てにはならず吾人の生涯又斯くの如し故に人は現在を語りて將來を語るべからず

●衆異と眞理

衆異却つて眞理を生ずと云ふ事あり是れは斯うである、夫れは斯うである否夫れは二つ共成つて居らぬあれは斯うであると各人が各異の意見を陳述主張するを衆異と云ふ何んでも協議事のある度に固くどつて動かぬ頑固ものゝ注意すべき事也一人の所存は往々にして過つ事あり彼のヘーゲルの唱へたる立破和の三段階が思想進歩の形式なる事を悟らば又聊か鑑がみるべき也。

●味ある言

古聖教へて曰く冷より熱を見然る後熱所の奔勞益なきを知る冗より閑に入り然る後閑中の滋味深長なるを覺ゆと又曰く事を急にすれば明かならず寛にすれば自ら明かならん是れを急にして忿を速き以て益々其頑を増す事勿れと。

● 獨り立ち

天は力あるものに與みして力なきものに與みせず天尙ほ然り況んや人に於てたや故に吾人は余りに上の手を引かん事を願ふべからず上時に手を放つ事あり又下の尻を押さん事をも望むべからず時に尻を押されて却つてヒツクリカヘル事あり。

● 筈や其日の内にひとり立

● 已れに隨ひ行くは

死ぬ事を思へば此の世が味氣なくなり成の必ず敗るゝを思へば

又成を希ふの念甚だ固からず力なき云ひ草にはあれども総べて世の中の事は上れば下り下れば上る盛者必滅會者定離昨友今仇父母妻子の愛も遂には離れざるを得ず只己れに隨ひ行くは善悪業等のみなるふげにうたてき。

● 言輕ければ

余は今迄直ちに善は善とし惡を惡とするを以て正しき人物とし且つ又其思ふ所は少しも含藏せずして悉くこれを言に發したり然るに夫れが爲却つて禍は常に襲ひ來り我が心身を苦しめし事一再にして止まらず又余が友は一言の過失によりて衆人の憤怒を買ひ泣いて謝したる事もあり言輕ければ則ち憂ひを招くのが語眞に身に泌みて恐ろし。

● 片角に押し込む

余が隣りに七十許りになる老人ありて花育てが仕事なるが其庭に並べられたる五十幾つの花鉢は代るく美しき花をつく然るに老人は其美しき花の咲ける者は椽に持ち來りて賞で四五日立ちて其花少ししほるれば又直ちに庭の片角に押し込みて顧みずあたり前なりと云へばあたり前なれども人情の轉變これにても聊か感ぜらる。

●自我實現と治善

某倫理學者説いて曰く自己の實現は社會共通の善即ち治善なると共に自己の最高善にして社會の爲めには各人が自己を完全にすると云ふ外には善なく自己の爲めには社會の治善を進むると一致して自己を完全にする外には又道はなしと。

●少しきの腕

少し腕ありとて誇る事勿れ。少し腕ありとて誇れば却つてわが身を失ふ事あり、彼の蜂を見ずや彼れは少しの尾劍を恃みてハチ起るが故に遂には人に叩き殺さる然るに吾人は少しの知識を鼻にかけて此の世を活歩せんと欲すあこ又淺ましからずや。

たのみなき角とし思へ蝸牛

●吾人の通弊

ジョソン博士曰く、我が子に如何なる書を読ましむべきかと考へつとある間に他の少年は已に二冊の書を読み終れりと。是れあるが爲めに吾人は只徒に志を高遠に馳せずして現在に働かざるべからず現在を卑しみて働かざれば又現在を出づること能はず、現在に働きて而して志を高きに持す是れ處世の秘訣たるべきか。

●腕のなき奴
腕ある者は容易に人に示さず而して其の腕のなき奴に限り頻りに腕のある偽ねをなし人前にて何かにつけて古語を引きて喋々論辨し以て腕のある奴じやと賞められんと欲す然して吾人は其最も甚しきもの也。

●よく善言を聞け

眞に親切なる人は時々面前にて其人の欠点を指摘す而して善人はこれを喜び受け不善人は忽ち色を變じて憤怒す故に古人も云ふ只善人のみよく善言を聞くと。

●意識ある誇張

自ら事實を構成し又自己の經歷したる所を隨意に文飾して語るものあり是れによりて以て他人を喜ばしめ兼ねて又自ら喜ばん

とする者は意識ある誇張にして自慢心ある人の爲す所なりと至言と云ふべし。

●私も其通り

莊子曰く世俗の人皆人の己れに同じきを喜び而して人の己れに異なるを惡む、己れに同うして是れを欲し又己れに異なるを欲せざるものは衆に出づるを以て心となす也衆に出づるを以て心となすもの安んず又衆に出づるを得んやと。

●青年の通弊

或人因循不決斷の青年を戒めて曰く自己一身上の行爲に關して父兄に相談を重ねて自己の決斷に訴ふるの道知らざるものは畢竟するに自己が勇躍奮闘の活氣を飲如せる罪にして他日に至り自己が痛恨の基を作らずんばあらず苟も心中に於て絶對的勇

氣の横溢するあらんには危険恐怖の細波は決して風に伴ふて生ずる事あらざるべしと又曰く今の青年は強いて粗暴執拗の所行を爲し絶えず人と小争をなし揚々自大なりとし且つ低位に適するの身を以て好んで大望を抱き大言を吐き以て自ら豪傑の風を得たりとなし却つて一失意に遇へば志氣沮喪して忽ち緘緘するに至ると吾人夫れかんがみざらんや。

●あら恐し

世に怨み程恐しき者はなし、例へば己れが悪くとも己れは怨まで人をば怨み己れは憎まで人をば憎む、夫れが爲めには蔭にて悪口する事あり無き事を作りたてて誹る事あり、然り而して其最も恐しきは、色事を借りて怨みを報かんと欲するものより甚た

しき者はなし。

●馳走が少ない

貧しき家に行きて馳走の少しと誹るものは誹る人の罪也否人情を知らざる者の言草也衣食足りて禮節を知る誰れか人に馳走をなして人と共に楽しむ事を喜ばざらんや、道は知れども盡すを得ず禮は知れども余財なしとは是れ貧世帯を持てる人の朝夕口にする一大痛苦と知らずや。

●己れは豪い

口には云はねども人は皆『己れは豪い』との自負心を有する者也、而して此自負心がやがては慢心となり倨傲となり偏狭となり遂には豪いが獨り天狗の豪いに成り終る語を換へて云へば此の弊は特に自重心強き人の陥り易き所也。

吾人の如く若き者は世事にも暗く思慮も浅ければ已れは豪いとの考へは先づく除き去るが肝要也、出来る丈け口を閉ぢて耳目を大きくするが至緊也世の中に若きものと豪き者程あてにならぬはなし。

●それが人情

一知己語りて曰く餘が村に一人の有志あり其人の財ありて豊なりし頃は意見も悉く通り又事ある時は人々常に上にカツギて敬ひ尊みしが財を失ひし今日にては敬ふ人もなくひそかに指してひそかに笑ふと、云はずとも知れたる事かな、人は道を敬はずして金を敬ひ人を尊まずして財を尊む、あゝこれあるが爲めに現世は滔々として皆金に狂奔す。

●善根を植ゑ難し

形ちを宇内に寓する事又幾何もなき事を思へば自ら胸中の慾念は消へ去りてそこに道心顯現すあゝ此の時の其心世にこれ程尊きものはなきなり昔より鳥の將に死せんとするや其聲悲しく人の將に死せんとするや其言や善しと云ふ洋の東西時の古今を問はず總て幾多の士は皆此の理に洩れず其臨終には必ず美言あり釋迦が厭世の念を起さざれば衆生の心底には善根を植ゑ難しとは誠に心理を穿ちたる言葉也。

●下葉は青し

只徒に己が名の大ならん事を望む事勿れ名とは實の賓也只徒に又名の大ならん事を願はんよりは朝夕わが誠の足らざるを嘆くべき也實なくして名の大なるは實ありて名の小なるは抑も何れが尊むべき又抑も何れが安らかなる。

去九月の暴風雨にて倒れし樹木を見るに其倒れたる者は多くは葉のみ茂りて根の淺きもののみ也『來て見れば下葉は青し初紅葉』吾れも人も夫れ心せずや。

●斯かる人に注意

フェルザム曰く俄かに友人なりと公言する人に注意せよ燃ゆるに先き立ちて焔を上ぐるが如き愛情は決して永續せずと。

●得たりがほ

知られんと思ひ誇ればなかくにわがまだしきを人に見らるる

出る杭は打たれ、蛙は飛び出して却つて人にも踏まれ蛇にも吞まる。吾人夫れ心せざらんや。得ぬ事に得たり顔する人にこそ。

仕落ちも恥もあるものぞ知れ

●余年幾何もなし

安井息軒年七十にして深夜手に巻を捨てず門人彼れの健康をそこなはん事を恐れ諫めて曰く先生己に老吾人病の起らん事を恐る乞ふ深夜の讀書は廢し給へと然るに彼れ襟を正うして曰く子等は年尙若ければ學ぶの日多し吾れ老余年幾何もなし故に益々學につとめざるべからずと。

●おかしき心

難儀せずして金を儲け出来る丈善き物を着出来る丈善きものを食ひて一生を楽しく暮さんと寝た度毎に目をつむりて工夫すれども一向良き考は出でず後には何時の間にか夢に入る、夢にては時々千両箱を拾ふ事もあれども醒むれば直ちに消れて元の無

になる真にたかしきは人情也。

●辯は黙に如かず

或人云へり人物が小なれば小なる程世間から非難されたる時は色々辯解して止まざるもの也と而して吾人は一口誹られては直ちに辯解し二口誹られては直ちに怒りドコマデも辯解して止まらず遂には辯解が辯解を生み、辯解が非辯解となりて煩はし故に云ふ辯は黙に如かずと。

●我の強き人

主我的觀念の強き人は事々に我意を立て是非を論じ稍々もすれば角立てて小口論を始め何彼につけて小我を張り人の迷惑は露程も察せず人と争ふ事を何とも思はず小さき事も大きく論じ笑ふべき事にも腹を立つ斯くの如き人は目の前にては賞めらるれ

ども蔭にては笑はる。

●自らめりこむ

神よ願くば吾れを七難八苦に遇はしめ給へと是れ中山鹿之助の勇氣也。

憂き事の尙此の上に積れかし

限りある身の方ためさん

是れ熊澤蕃山の心氣也。昔より云ふ人盛んなれば神崇りなく氣壯なれば百事皆當ると、而して吾人は手を合せて神に助けを叫び自ら悲みて自らメリコム余りに夫れめめしからずや。

世の中をなになげかまし山櫻

花見る程の心なりせば

●出た〜

宴會などにて思はず知らず飛び出して、「デタデタ、スットサノ
ヨイヤサ、酒は千杯飲め湯釜で湧かせ」と躍り出す人程愉快な
るものはなし、記者も藝があつたならと度々思へども今の我が
身にはそれが出来ず何時も四角ばつて興を殺ぐ去れど心の中
は何時も、スットサノヨイヤサ。

●即時断行

行く先きは兎やせん角と思ふ日の

積りて老の身とふなりける

恐るべきは今日只今也、決して明日にあらず。然り而して此世
に於て今日只今より早きものはなく今日只今より又新しきもの
はなし。

●むつかしい所

かゝる時さこそ命の惜しからめ
かねてなき身と思ひ知らずば
昔の武士は云ふ一旦心の中にて死したる者にあらざればまさか
の時には役には立たずと。

●口と心は他人

人は口には常に好辞を弄すれども下の口にては常に糞尿を放失
す。

裏表なき團扇や清水の如き人はとても此の世にあるものにあ
らず況んや玲瓏玉の如き人をや。

水も折々は濁り

天も時々曇る

●自ら選べ

或人曰く自重心なく自信力なきものは臆病となり怯懦となり一言毎に周圍を窺ひ一行毎に他人に諂ふ生より死に至るまで徹頭徹尾外他の奴隸となり自ら行を選ぶ事能はず自ら事を決する事を得ず常に外界の恩恵を待ち恒に他人の頭使を伺ふ這般の輩には自己許り賤劣憐むべきものはなしと。

●娘に似たり

西人曰く機會は内氣なる娘の如く差し俯向いて過ぐるか故に不注意なる者遅緩なる者怠惰なるものは其面を見る事を得ず爰が況んやそれを留め得んや只敏捷なる者のみよくこれと握手する事を得るのみと。

●善は善悪は悪

孟子人の性を善と云ひ荀子はこれを悪と云ふ而して董仲舒出で

て始めて性善悪混合説を稱ふ思ふに其善なるものは自ら善也其悪なるものは又元より自ら悪也而して其中間のものは善悪何れにも移り變る。

●心の衛生

遜子邈の言に曰く善く生を攝する者は思を少くし慾を少くし事を少くし語を少くし懇を少くし怒を少くし惡を少くすと、然るに吾人は常に思愁多く事多く而して怒と慾とは身を離れず自ら生を短ふする所以也。

●性質の表徴

言は心の聲也、色は心の容也而して舉止は其性質の表徴と云つて可ならんか、眸子は又心の鏡也、孟子云ふ人に存するもの眸子よりよきはなし眸子は其惡を掩ふこと能はず胸中正しけれ

ば則ち眸子瞭也胸中正しからざれば眸子くらし其言を聞くや其眸子を見よ人焉かくさんやと。

●成功の堂

西人曰く成功の堂は常に其門戸固く閉ざる入らんと欲するもの自ら之れを開かざるべからず而して其都度閉ざられて先入者の孫といへども子といへども自ら其戸を排せざるものは其堂に到る事能はずと。

●治心修心

佐藤一齋曰く、心身は一也心を養ふは澹泊にあり身を養ふも又爾り心を養ふは寡慾にあり身を養ふも又然り小薬はこれ草根木皮大薬はこれ飲食衣服、薬原はこれ治心修心。

●五指即ち一手

世祖嘗て各宗派の人が争論するを見て其手を揚げ之れに謂つて曰く幾指なるかと彼等答へて曰く五指也とここに於て世祖彼等に謂つて曰く五指即ち一手ならずやと、宗派の爲めに覇を争ふ現代の僧呂夫れ少しく鑑みずや。

●遂には表はる

一の嘘を隠すに更に又十の嘘を拵へざるべからざるが如く秘密の最小部分を明したる者は最早其他をつとむ事能はず問には落ちで語るに落ちるこれ又偽りの遂に包む能はざるを戒めし言葉也誠にましたる智慧はなしとは慥に夫れ千古不磨の金言と知らずや。

●眞の文學者

故高山博士は曰く凡そ文學者に要するもの學殖然り識見又然り

而して最も得難きものを氣魄となす是れを以て真正の文學者は古へより傑士の事業也彼れにして若し其所を換ふれば或は教への爲めに血を流すの美人となり或は義を見て難に赴くの國士となる夫の紛々たる遊蕩兒無頼漢にして偶々穿俞の技を弄ぶもの果して何するものぞやと又或人は曰く才學の見る能はざる所を愛はこれを透觀す學は機械的也情は生命也學あつて文飾あらん規則あらん然れども熱情の之を溶解形造するにあらずんば遂に詩歌なく音曲なしと。

●家康の用意

家康嘗て秀吉に答へて曰く

「某は御承知の如く三河の片田舎に生れたれば何も珍しき書畫調度の貯へはこれなく候、されど某が爲めには水火の中に

入りても命を惜まざる者五百騎許りも侍らんこれこそ家康が身にとりて第一の寶と存するなれ」と

幾分強きを秀吉に見せたがりし家康よし多少の誇張はありとするも彼れが用意の一般はこれにても聊か察せらるべき也。

●敬遠

才を待みて空威張りに威張り虚勢を張り他人を輕蔑し常に人を抑へて己れのみ高きにのぼらんと欲するものは必ず敬して遠ざけらる、よし表面は如何にも其人を敬ふ様なれども實は心に嘲けり笑ふ然して斯かる人に限り一向自ら夫れを悟らず譽むれば益々ツケ上り愈氣取りて愈々高ぶるたかしさ云はん方なし。

●あの人は

心にて「あの人は」と慕はるゝ程力強きものはなく又心にて「あ

の人は」と嫌はるゝ程恐しきものはなし心にて「あの人は」と慕はるゝ人には福自ら集り來り心にて「あの人は」と嫌はるゝものには又何處よりか禍來るあゝ吾れも人も此の心にて「あの人は」と慕はるゝ者になりたきもの哉。

●其徳全し

行はずして語る人あり、行ふて語る人あり、行ふも語らざる人あり行はずして語れば人笑ひ、行ふて語れば其功薄く黙して行へはこゝに始めて其徳全し。

●大怪物

ホルムス曰く處世と云ふ大怪物の怖しき長髯をふり立てて來り近く時若し勇敢なる青年あり敢然逆ひ立ちて其髪を博握するならば則ち彼は髪の脆くも抜けて彼の手に残るに驚くならん蓋し

大怪物のふり立つる怖しげなる長髯は唯疑懼を抱ける怯冒險者を威すに過ぎざればなりと。

●思ひ切れ

成敗を度外に置かば心常に平かなるべし大膽なる行爲を却つて安全なりと叫びたる(チルソンの)勇氣吾れ甚だこれを愛す吾れも人も知る如く、小溝と雖も思ひ切つてズンと飛ばざれば水に落ち込む恐れあり、思ひ切るとは己れを捨てて動くこと也、古の偉人即ちこれをよくせり、吾人それひとへに萬全をのみ計りて、朝夕只クヨクヨすべけんや。

思ひ切る心の中につるぎだに

あらば浮世のつなものは

●静観

心を静めて物を見れば、たかきこと多く、心に怒りて物を見れば怨むこと多し怒れる目には、ひがことも正しくうつりなき事も静ならざれば正しくは見えず心すべき也。

●廣き世界

「身に議論なければ世界即ち易し」こは慥に心に銘すべき金言なりとは飽くまでも承知すれど、どうしたものか稍々もすれば口に角立てて、泡ふきて、この廣き世界をせまくす、わが心の細き故にや。

●記者に望む

記者に望むもの九あり、一つには識見也、二つには學殖也、三つには氣魄也、四つには筆を以て書かずして涙を以て書くこと也五つには權に走らずして弱きに同情すること之れ也、六つに

は情理を提けて進み行くこと也、七つには心を恬淡にして常に和平を保ち衆の惡むをも必ず察し衆の好むをも必ず察すべきこと是れ也、八つには最大多數の最大幸福を標準として筆をとること也、九つには新聞が口と筆との事業なるを耻ちてわが身のわが筆に及ばざることを恥づることこれ也口と心と他人ならざらんことを心掛くべきことこれ也是れあらば記者の筆は世を動し人を化し萬生の擁護者たらんこと期して待つべき也。

●獨身

「獨身で居ると云ふのも云はくあり」獨身を好む女のあるべき筈はなけれども、それらしき風の吹く心地す、巳れのひがめか、もしありとすれば其罪誰にかとはん、教育家にか社會にか果た自然の勢にか、問ふも答へず、答ふるも應せず、嗚呼それこの

世は一步一步、歩を闇に進めつつあるか。

●己れの才

非分の望を抱けば身苦し人は只己れの才能の出来る限りに於て出来る丈己れを大きくせんことを心懸くべし、己れの才は己れより外に知るものなければ親の、すすめも人の諫めも、あてにはならず、故に自信を以て事に當り敗るれば、それまで也、天運とあきらめるまでの事也。

●分は常なし

「人も世の果てを觀せよ、落し水」水は暑き日に人の命をつなぐ米を育つれども、育てあぐれば、一ごとに「ドツ」とつき落さる、そまの花も盛りには、人にはめらるれども、やがては棒にて叩かる、分は常なし故に時めくも誇るべからず、巧あるも安んずべ

からず、浮世は常なければ也。

●吳臨川曰く

吳臨川曰く予嘗て天下の人を觀るに凡そ氣溫和なるものは壽、質の慈良なるものは壽、量の寛洪なるものは壽、言の簡默なるものは壽、貌の重厚なるものは壽也と至言也。

●道の歩き方

塵の立つ時は人より先がよく、闇夜には人の後より行くが安らか也、又人多くしてキシル時は、先きは苦しく後も又恐れあれば中に居るが肝要也、道せまき時は一步を譲りて後れて徐に歩めば寛かなれども競へば肩をすり、身苦し、たかしきやうなれども聊か處世の道にかなへり。

●米の花

「誠あるものにだてなし、稻の花」米は世界の人の命の親なれども別にかざらず、却つて、ばたん芍薬の如き用なきものが、身をかざる、梅も櫻の如くは華やかならず松も杉も皆然也、又吉野や嵐山は、飾れども富士には及ばず誠足らざれば也。

●神になるな

この世は矢張り人にて暮すが善し、神となりて渡らんとすれば身苦し。

●親和の至り

是非を責めずして世俗と處るは賢の至也酔うて此世を觀る知の至り也、獨行の操を持しながら尙獨醒をほこらずして世俗と處るは親和の至り也。

●精誠の至り

莊子曰く、眞とは精誠の至り也精ならず誠ならざれば人を動すこと能はず、故に強ひて哭す悲と雖哀しからず、強ひて怒るもの嚴と雖も威ならず強ひて親むもの笑ふと雖和せず眞に悲むものは聲なくして哀し眞に怒るものは未だ發せずして威也眞に親むものは未だ笑はずして和す眞に内にあるものは外に動く是れ眞を貴ぶ所以也と。

●人生最も苦しき所

胸中一戀字を擺脫すれば充分爽淨充分自在人生最も苦しき處これこの心とはよくも云ひ得たり噫々それ吾人青年輩は何の日にこの境地に至り得るや。

●愚の極

己が高き理想を凡人に打開けて同情を求むるは愚の極也、又己

が國家社會に盡さんとする献身的意志をば父母兄弟に向つて話すべからず是れ却つて己が献身的意志を滅殺せらるるの恐れあるのみならず却つて彼等をして己が爲に心配を重ねしむる憂ひあるに過ぎざれば也古人曰はずや下士は道を聞いて大に笑ふと

●天地の大

天の大なるは物として覆はざることなきが爲也、地の大なるは物として載せざることなきが爲也。

●澁柿を見よ

花咲いて始めて水仙の葱に異れるを知り、熟して始めて澁柿の甘きを知る、ワシントンもエトンの學校にありては痴漢と呼ばれゴウルドスミスも學校にては木匙と嘲けられたり去ごも一は遂に大統領となり一は遂に文豪となりて共に名を一世に馳せぬ

嗚呼是等の偉人の偉人たりしを得しは、生得の才能によれるか習得の才徳によれるかここ吾人の大に討究を要す。

●學を銜ふ

人前にて差し出口多く問はぬに語り出すは學を銜ふ也己が才を示したがる也、問ふもひかへ目にして遠慮することはなくしたはし兼好法師の愛嬌ありて、言葉の多からぬこそあかず向はまほしけれとは即ち是也。

●自適

自適の尊きを知れば強ひて人を誘はず又強ひて人に物を進めず酒は人の飲むにまかせ、歌は心の開くるを待つ、無愛相に似たれども決して然らず。

●死後に彰はる

偉人の眞心は死後に彰はれ、人の眞價は棺を覆ふて始めて定まる。然るに世には、稍々もすれば盡きずして已れに眞心の存することを吹聴せんと欲す。名は實の實也。てふ語を解せざるにか余に拙作あり。

つくしたる後に始めて眞心は

世にあらはるるものところ知れ

●短氣は損器

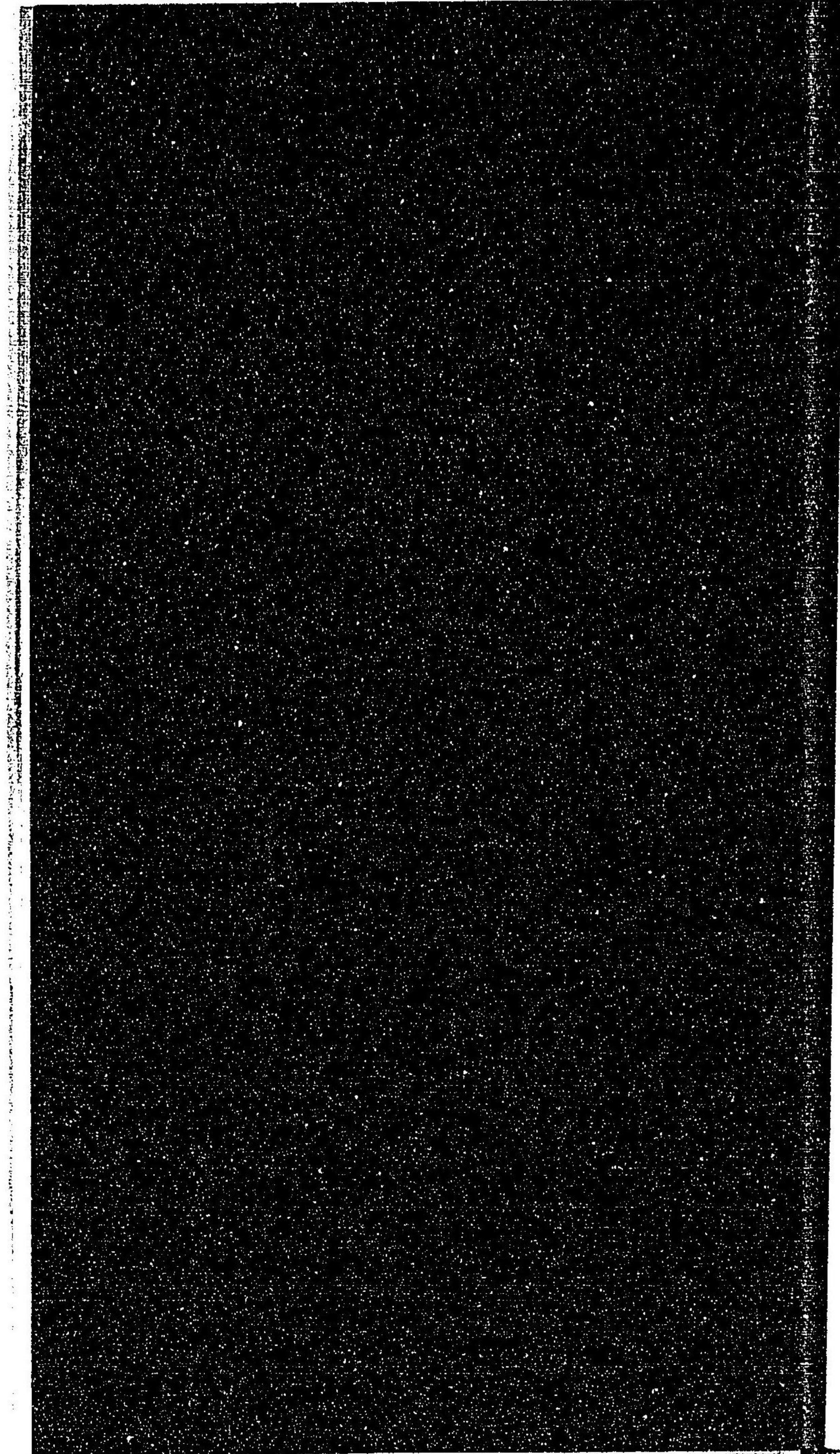
短慮の戒めとして盤珪和尚のものせる、十條眞に面白し、一には後悔あり二には物くるし三に其愚表はる四に知ある人親まず五に他人に仇の思ひをなす六器を減す七病を生す八争多し九苦勞多し十衆惡發すと、心すべき也。

●水なる哉

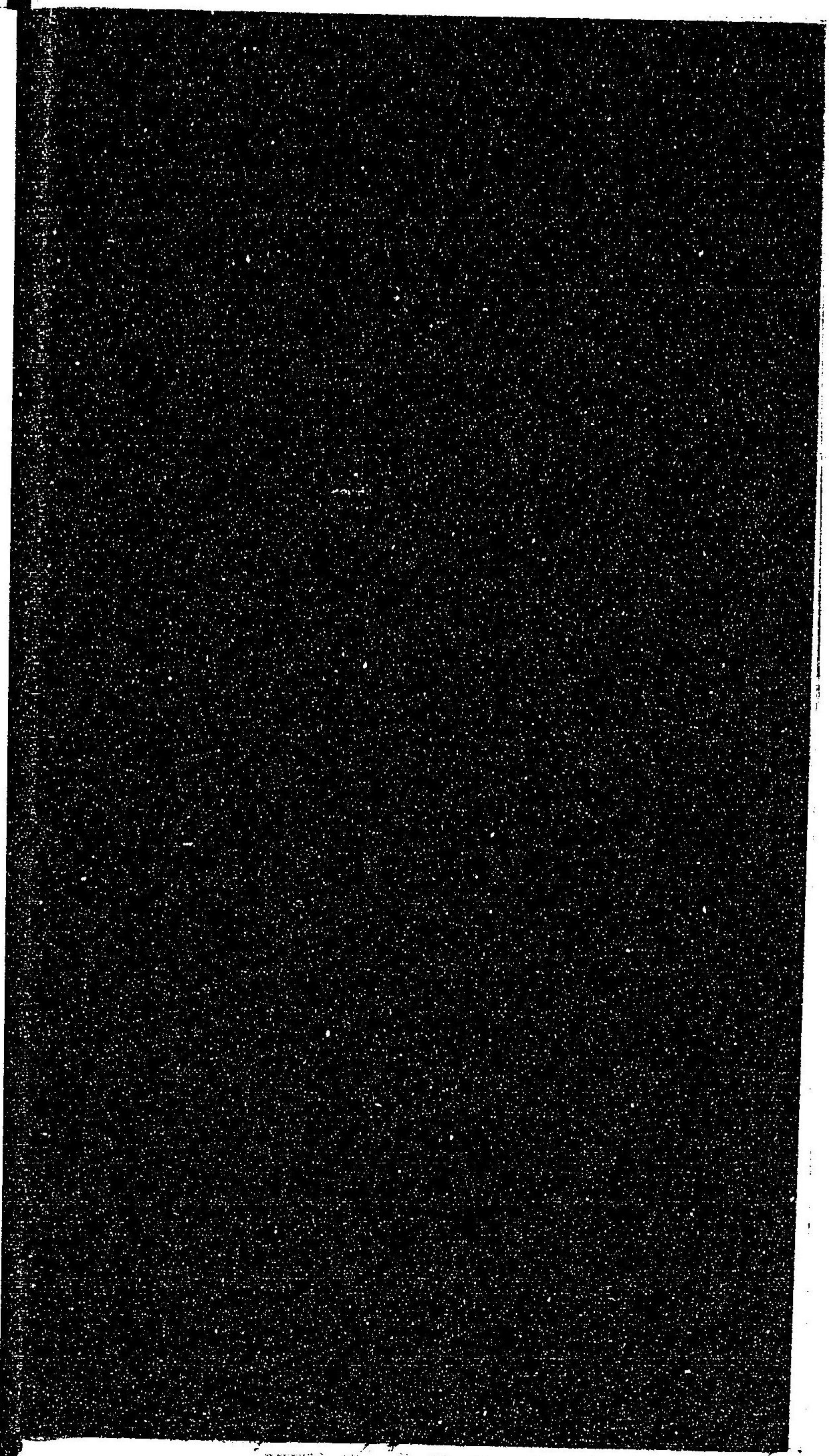
徐子曰く仲尼烝々水を稱して曰く水なる哉水なるかなと何ぞ水に取るかと、孟子曰く源泉混々晝夜を舍めず科に盈ちて後進み四海に放る本あるものはそれ是の如し是れ是れをとるのみと。

●金言より實行

金言貴きか實行貴きか、現代學者の一顧すべき問題也只徒に學に精にして行ふに粗なる現代の學者余は將にこれに睡せんと欲す。



附
錄



◎母に代りて魔城の女學生に與ふるの書一

母が可愛ゆき御身を遠く離して魔城に遊ばせ申すは學びの道を踏み分けて躓ては賢き婦人となり家の爲國の家め又一つには御身の行く先きに良縁あらんことを願ふてに候決して世の流を汲みて御身を虚榮心に富める今時のハデヤカなる婦人となさんが爲めには無之候斯くの如きことは出立の當時已に細々と申し上げたる事にて更今申すまでもなきことには候へ共此の頃の新聞を拜見いたし聊か胸に浮びたる事のこれ有り候まま拙き筆を取り申し候間御隙の折是非御一讀下され度候母が朝夕心に念じ候事數多く候へ共先づ片時も胸を離れざるものは身を謹むことの一事に候先達も○高生と○學校生との關係をチラと新聞にて

拜見いたし少からず胸を傷め申し候元より御身は小學校時代より他の生徒の模範とまで歌はれ村の校長も末頼もしき娘とまで云はれたる事これあり候へば其覺悟は元よりの事とは存じ候へ共男女の關係は又誤り易きものに候へば念の爲め申上げ候。男に對して半分は好み半分は嫌ふ位の心掛が肝要かと存じ申候或人の戀人に對しては不仁者も仁者となり不徳漢も義人となるものに候とは誠に眞を穿ちたる言葉かと存じ申し候元より總ての男を疑へどにはこれなく候共兎角世の中の人の口先は心とは全くの他人なることを得と御承知下され度候殊に男の女に對する時と女の男に對する時とは互に飾りたる上の義理多く候へばそれを眞情よりの仕打などと思へば身を過つゝの始に候又十分學問知識を備へ將來見込あるキリツとしたる人格ある學生は迎も

女などに目くれてミダラなる行爲は致すまじく候思へば先達の紙上にて拜見いたしたる人々は我が身の將來に不幸の種子を蒔きたると同じに候殊に掲げられたる方々の御兩親の心中を推し計り候へば直ちに御身の事にまで思ひ及び涙が先きに湧き出で申候是れも子を思ふ親の心からにて候。

尙此度は序でを以て母が女に對する平生の意見を二つ三申上げ候間これも御熟讀の上御氣に召さぬ所これあり候はば御遠慮なくば思召しの旨御認め御送り下され度候。

其二

女らしく、白隠禪師の申し置かれたる、らしくと云ふ事を呉れ呉れも御忘れこれなき様願ひ奉り候實に女はらしくするが人の尊敬を受くるもとかと存じ申し候口が達者で才があり議論など

では時々男を押し込む位にあるはわらき様に候へども是れとて心あるものより見れば却つて笑ふものに候ごこまでも母は御身を女らしく育て男に對してはよし已れ正しくとも負けて居る位のしほらしき女に嫉けたく候○○子女史や○○女子の如きは母が露程も望む所にはこれなく候自由結婚をする男女は又自由離婚をする覺悟を持つべきものに候よく考へ候へば自由結婚は稍々もすれば盲目的結婚に陥る様存せられ申候只今の女學生には自由結婚などと人前も憚らず申さるゝ方もこれ有り候へ共あれは如何なものかと存じ申候是れにつきては少々たかしき様に候へ共御身の御意見も承り度候、然し母はこの自由結婚にはごこまでも不賛成に御座候而かも母が爲にはあらずして御身の爲に不賛成に御座候其理由は前きに申し上げたる通り盲

目的なるが其一つに候冷かなる他人の觀察なき爲後より無理の出づるが其二つに候然し斯くの如き冷かなる言葉は若き男女の耳には露程も入るものには是れなく候去れど斯の如き事は御身には不要なる言葉かと存じ申し候隠くさず申し候へば母は御身が兼てよりのしほらしき行に嬉し涙を流すこともこれ有り候。獨身主義を唱ふる女は我が儘勝手な女に候獨身女の議論と立派なる家庭を作られたる賢婦人の議論とを御比較に相成其説の如何なる所に相違あるかを御悟り下され度候利巧ぶることが已に利巧ならざるが如く獨身主義を唱ふる女は已に其精神に於て男に連れ添ふ事の出来ぬ女に候、尤も其中には道理あるものもこれあるべく候へ共一般より申し候へば世の識者も絶対に賛成は致すまじく候元より女とても何處までも男子に屈服する必要は

これなく候へ共夫婦の道は女が負けて居る所に和合が出来一家の治りもつくものに候又一步進めて申し候へば巳れの正しき時にも尙勝を夫に譲りて居るが如何にも女らしき女にはあらざるなきかと存じ申し候。

其三

着物は絹物ばかり送り度は山々に候へ共これとて人格あるものより見ればよき着物着くるもの程心のキリツとしたる女はこれなく候かくさず申し候へば化粧などつけて身を飾るは一つは巳れの心にミダラなる考への存する証據に御座候殊に近頃魔城には厚化粧を施すものこれあり候由これは誠に薩摩の祖先にも似ぬ悪風かと存じ申候去れど斯くの如きことは御身朝夕御接近の諸先生や御地のキリツとしたる御婦人を御覽下され夫れを手本

に御見習ひ下され度候、又學科に對しては、決して輕重はこれなく候へ共わけて家政學には御心を御注ぎ下され度候殊に育兒裁縫料理其他家婦として必要の學科には一心に御奮勵下され度候、實に將來一家を立て夫を安んせしむるには英語音樂などよりは此家政學が大切かと存じ申し候、これは特別の例に候へ共母が同窓の友にして英語音樂などには精通致し子供の着物一枚縫ふ事の出来ぬ方これあり候これは全く女の本分を忘れたる御方かと存じ申候。役員たらんとする考へ、女學校を終へて將來は役員にならないごとは露程も御考へこれなき様願ひたてまつり候最も郷里に歸りて村の小學校などに通ふことは父も母も望むところに御座候去れど一生を獨身にて教育に盡すなどと當世向きの片輪主義は

許す所にはこれなく候、殊に官衙に出でて婦人に關係なき事務に従事し一生を終らんなどは毛頭老へこれなき様これも前以て願上げ候。

尙又世に出でたる後も婦人會の會長にならん、慈善音樂會の會長にならんなどと表だけハデなる役員などには御目をつけられぬ様これも御願申上候、實際悪く申し候へば何々會長。何々會員などとカケマワル方には割合に我が一家の事には手の届かぬ方多き様存じ申候然し母も一時は左様な事にも手を出し申し候これは母が虚榮心に驅られたる故にて候、次に雀の如き女は誠に卑むべき女に候元より無邪氣にして賑かに語ることは執念深くして無口なる人よりは人に可愛がらるるに相違これなく候へ共稍々もすれば云ひ過ぎて人の悔りを受くることこれ有り候是

れは余り學者ぶりたる云ひ様に候へ共謹むと云ふ字は言はんとして口先きまで出でたる事を再び省察して云つてよいか悪いかを考ふるが其本義に候去ればとて高く止まりて孔雀のやうにキドレとには、これなく候、只心に思ふて舌に話す位の謹み深き人になれとの心に候。

其四

又世の中には女の身を忘れて男女同權論や女子參政權などを聲高く申さるる方も有之候へ共あれは此處に申上ぐる程の事にはこれなく候。又雑誌や新聞紙上などにて男女同權論や慈愛眞正論などを説かると方々を以て直ちに己が味方のやうに御思召され候らはばまことに行く先きは危きことと存じ申候、つまず申し上げ候へば新聞雑誌などにて色々女に味方さるる方々に

は却つて妾などを蓄へてわが妻には憂き目を見せらるる人多き由母は承り申し候、ことに自然主義などと母は只聞いてさへ恐しき様存じ申し候又今の立派なる博士達には「女丈夫の手によりて育てらるる女の將來は誠に不運に候」となげかるる方も有之候まことに此方々の仰せらるる通り總て世の中の事は一般的と云ふことか大本かと存じ申し候、若し女の方々がすべて政事などに身を委ねられ候らはゞ世の中は如何になり行く事かと存じ申候思へば世の中の人は女子の小さき俗事に誠あることを御忘れ遊ばさるる様存じ申候これは誠に世の中の爲に悲しむべき事に御座候、夫れ故御身はごこまでも、女は内と云ふ事を確と心にきざみつけ下され度候、木にすれば女は根にて、水鳥にすれば其足にて候、梅も櫻も根が土中に隠れて働

いてこそ香ひある花も咲き出づるものに候又水鳥のやすらかに泳ぎまはるも隠れたる足のたかげに御座候、夫れを悟らすして根と花とを一樣に仕様などはてふご鼻を目の上につけ様とすると同じ事と思はれ申し候。
 尙二つ三つ申上げ度事有之書き續け居り候ところ父上様に見つけられ「娘には余り言ひ過ぎたる言葉ならずや」と小言を申され候間ここに筆をたさめ申し候然れど母は只御身の行く先きに幸あれがしとの一念より、つつます申し上げたるものに候へば何卒御許し下され度候、母は此度の學年末休暇の御歸りを何よりの楽しみに待ち居申し候、何時もながらの母が口ぐせには候へ共本年も美事上席を以て御及第遊ばされ姉上様達より御褒美をいただかるる様神かけて祈り奉り候と。

◎春興漫筆

▲(一) 春

春は暖なり、人にすれば情深き人なるべし、其氣和かにして人の肌を犯すことなし、かるが故に草木は其惠みによりて香ばしき花を開き、鳥は喜びて歌ひ蝶は其惠みに、あまへて舞ふ、そはともあれ彼の大を以て誇り強を以てほこる、わだつみの神さへ尙春には、なづけるにや荒き心もあらはさず、徳の至りなり

▲(二) 梅

梅は寒き花也、やせたる僧と棋を圍みつつ見るべしとは云ひ得て面白し、梅は女にすれば女丈夫也、一寸手出して折り取るべからず

梅に鶯よく見て止まれ

花のよい木にや實はならぬ

▲(三) 櫻

櫻は暖き花也、若き友と歌ひ興じつと見るべし、手折るに易しこれには誰れも異存はなかるべし、去れど實のなきが玉にきづなるべし、今櫻を女とすれば梅は慥に男なるべし

梅と櫻とちぎりしなれば

よそに吹かせん朝嵐

▲(四) 春の月

角立ぬのが風情なれ朧月、人も斯く有りたきもの也、秋の月は餘りに角立ちて餘りに清らか也、澄み過ぎては魚も水にすまず止めよ止めよ云ふを止めよ、汚れたる、この世に於て吾れ獨り

醒めたりと

▲(五) 柳

柳は角立たぬが其美の一也、静にして飾らざるは其美の二也、外柔内剛は美の三也、高うして高ぶらざるは美の四也、今之を合せ評すれば柳はごこまでも君子的也、世の人如何にや

▲(六) 蝶々

蝶はごこまでも女也しかも貞操ある女にはあらずして浮きたる女也、花を便りに狂ひまはるみだらなる女也、身に、相應しからぬ「フリンデ」をつけて、なよなよと花から花を飛びまはる様は、ごこまでも、酌婦的也、藝妓的也、花を尋ねながら花をばよそに戀人と花下に眠むるはごこまでも姪婦也、賣春婦也
蝶の無邪氣なる姿を以て斯の如き心を有す、明治の青年男子聊

か内に省みる所あつて可ならんか

▲(七) 藤

藤は何となく、たぼつかなし色の薄きが爲めなるべし、藤ならずとも紫色は總て愛相なし赤のにぎやかなるには遠く及ばず、愈々咲いて愈々下るは藤の特色也、去れど人に縋りて一人立ちの出来ぬは又藤の耻辱也、獨立の堅志なくして人に縋り人に下る吾人の手本とすべきものにあらず

▲(八) 鶯

鶯の一聲に春を知り鶯の聲に一入春の長閑さを知る吾れも人も同感なるべし

鶯は音樂學校の卒業生にやあらん眞に歌上手也、去れど雀や時鳥の如くむやみには歌はず、歌ふにも氣を張り力を入れて腹に

て歌ひ、雀の如く舌音にては歌はず故に其聲なんとなくひきしまりたる心地す、真に彼れは音楽家也

▲(九) 春の雪と氷

雨霰雪や氷とへだつれど

とくれば同じ谷川の水

つめたき冬には雪は雪也氷は氷也、とけ合ひて楽しき海に出づることを知らず、哀むべき也、去れど春に遇ひては、たかしきによ互に我を折りて谷に落ち合ひ、笑ひ、さざめきつと下り行く、情けの前には我も立て通しがたければ也

▲(十) 春と詩人

春や真に詩材に富む、山川草木皆文也、花鳥風月皆詩也、行くとして文にあらざるはなく、聞くとして歌にあらざるはなし真

に春は詩人の寶庫也

今この稿を終へんとするに當り試みに其一二をあげて筆を擱かんか

人にさはらぬ春霞、しめやかにふる春の雨、長閑なる野になくひばり、罪なき、すみれ、れんげ草、かろへ來れば心も浮き立つばかりなり(完)

◎ 鹿城漫録

▲ 鹿兒島の人を

鹿兒島の人を悉く我が子と思へば、今の様に絹物ぐるみで「あまやかせて」育てたくはなし、ますこしは厳しく躰けて朝夕は木綿ですませ、座作進退や言葉の使ひやうも、かうしたものと

頭の一つ位は叩いて教へたくもあり、去れど「ママ子」なれば、叩くも叩かれず、はがゆきこと多けれどもいたし方なし

▲下駄の音まで

都にては下駄の音まで「金金」と響くやう也殊に霜朝は「食れん食れん」と響きて心細し、去るに女の、はける「セッタ」のみは、「ズルズルシャレシャレ」と囃しかけて、どこまでも平氣也

▲都は

都は都臭しとて嫌ふ人あれども、境を借りて心を調へんと欲すれば、山あり川あり俗氣を拂ふに些の障りなし、我が心の腐り居ては、何處に行くも清からず

▲天保山

天保山は寛廣也、少しも氣をどがむる處なし前に錦江灣の扣ふ

るも其一因なるべし

「白砂青松遠く連り漁火波の間に明滅す」と云へば直に三保の松原を連想し天の羽衣を置き忘れては無きか若しありもせば吾れも彼の漁夫にならひてんと行く度毎に松の小枝を仰き見るは吾れながら余りにたかし

▲祇園の洲

祇園の洲は、帯にや短し襷にや長しと云ひさうな景色也、和歌にも讀んで見たく新體詩にも作つて見たき景色也、去れど和歌も新體詩も拙ければ已には出來ず祇園様が怨むか知らねども、ここには云はず

▲圖書館

心地よきは圖書館也、人は多けれども、いつも靜也、只時々へ

んもて書きとる音や頁開け行く紙の聲のみして他には殆んど人なきが如し

一人一回の閲覽券は一錢なれども一ヶ月券は十錢也之を日に賦れば三厘三毛也一日に二度通へば一厘六毛也眞に有り難きは圖書館也、明治の聖代也

云ふに及ばぬ事ながら彼の化學者が密室に於て製造したる火藥の他日に破裂して岩をも粉碎するが如くこゝにて修めし幾多の健兒が、やがては奮起して國家の爲に盡すかと思へば嬉しさ限りなし

▲城山

城山は偉人の跡だけありて登ればいつも國家的觀念湧起す偽りにもあらず、故に此處にては、吞氣なる和歌も歌はれず

亦踊るが如き新體詩もヒクツタとて不似合也

余やこの山に登ること己に十度、其五は子供と共にし其二は知己と共にせり而して残りの三は單獨也

この山に登りて先づ念頭に浮ぶものは何ぞ山の美か、市内の壯麗か若し然らずんば遠く南方に聳ゆる薩隅の連山か、非らず非らず

この山に登れば何時も「生きた學問をしたうござる」と叫びし南洲翁の至誠を追想して吾人學生に這般の誠なきを嘆せすんばあらず、嗚呼誠貴きか、學貴きか、これこの山に登りたる時の感想也

▲櫻島

櫻島は雄大也、朝にも仰ぎ、夕にも仰ぐ雪これに積めば愈莊大

也、而して朝夕この俗氣の満てる鹿城を眼下に睨める其様は、南洲翁の立てる心地してこよなくたふとし

三百六十五日一日として仰がぬことはなけれども、未だ嘗てこの島に飽きたりと云ふ聲を聞かず、飾れる田の浦公園に飽きて、飾りなき、この島に飽かざるは尙、人の心に頼もしき誠の存するにや

▲浄光明寺

名から己に禪的也、哲學的也、こゝに行けば何時も人生を觀じ無常を感じて、汚き心も幾分か淨はれて光明を放つやう也殊に若き人々の墓を見ては、用なきこの身、餘りに生きながらへたりと思ひて、吾が身の不甲斐なきを悲しまずんばあらず

▲詩材多し

鹿城には勝地多し、櫻島は詩に適し磯は美文に適す、而して琉球人松は和歌の好詩材也

次に天保山は韻、散、何れにも適すれども韻文よりは散文が適當ならんか、然り而して獨り城山は武士的也、感慨の情を舒ぶるに適す、知らず鹿城の詩人之に左祖するや否や

◎私の好き嫌ひ

▲車屋さん

袖ふり合ふも他生の縁、乗せて輓くのは尙ほ深い。、、、笑ひながら愛嬌タツブリで「ドッコイショ」と輓き出す車屋さんは僕は大好き、それに話など續けて輓くのは尙ほ更喜欢きじや「五間乗せてもた客はた客、乗るも乗せるも縁かいな」と云ふ調子

の情けある車屋さんが大好きじや。ソラツ、車ジャツ……
 ……馬鹿ツと人に出會する度に大聲でドナル車屋さんは大嫌ひ、
 乗つた御客も顔がない。

▲奥さん

客があれば笑顔で迎へ、世間話に花を咲かせて人言云はず、賑やかに語り賑やかに笑ふ人が大好きじや、藝はあつても無き振りで客のある間は猫さへ打たぬと云ふ奥さんが大好きじや、貴婦人ぶつて智者ぶつて孔雀の様に羽根ひろげ高く止まつて動かぬ人は私しやいや。

夫れは扱て置き又家の仕事の閑隙には子供集めて裁ち縫ひや、昔話しをする人はこよなく僕の慕ふ人。

愛想よく人事云はず慈悲ふかく

下婢あはれむ人ぢゆかしき

▲書生さん

形ちの奇を好む書生さんは否である肩を怒らしたり、大きな杖を持つたりして、犬に遇へば吠と云つて叩き猫に遇へばニヤンと云つてオドス書生は大嫌ひ、又時々人の分らぬ英語をヒテクツテ豪がる者は尙ほ嫌ひ學生ぶらずに温順しくベスポールよりは柔道に、ロンテンスよりは撃劍に精出す者が私しや好き

▲床屋さん

黙つて居て摘む床屋さんよりは語りながら摘む床屋さんが好きである、そして鬚を剃る時馬鹿に頭をソツクリ反らせたり、口や唇を痛いだけ摘まんだりする奴は大嫌ひ

「コラたまん様の鬚は將來望みやゴアハン」と云ふ奴よりはコラ

「たまん様の鬚は將來有望ゴアス」と云ふ奴は大好きじや、冗談は扱て置き、

理髪が済んでから、お客に向ひ「私が剃刀の使ひ方や、頭の洗ひ様に無理な所はありませんか、摘み心地は好うございますか、稽古ですから遠慮なく仰やつて下さい」と問ひ掛ける奴は大へん、じや

▲番頭さん

だしぬけに、「なゆたけやつとな」と云ふ番頭さんよりは天氣の挨拶、煙草盆と云ふ順序で客を引き止める者が大好きじや、「ソゲン安しとがあいもんな外ん所に行つた買やし」とはねつける奴は大嫌ひ、「まけて上げもんでどうかよく品を見つせ(幾品も出して見せて)たまばいやつ給もんし」と云ふ奴には高くても一

錢位は此方から負けてやる、

「買はねば賣らぬ」と云ふ顔付の番頭さんと他店の悪口云ふ者が大嫌ひ又氣持の善いのは買はずに立つ時愛想のよき番頭である

▲賣り子の呼び聲

賣り子の呼び聲とはチトおかしいが市内に於ける呼び聲の好き嫌ひを書いて見やうか。

「日本一のわーきびらちゃん」是れが僕の大好きで出會した毎度に未だ一ぺんも笑はぬ事はない、所が「ニハートリノキリミ」には大閉口だ是れは此の間の事山之口町から二本松馬場通りに出る角でヒョククリ、ニハートリノとやられてビククリしました、とは云ものゝ彼が孝行者だと云ふ事を聞いては斯く云ふ記者は實に耻かしい。

▲食べ物

牛肉と鶏と米の飯が一番好きで、飴も好きである、學校では飴先生と云はれ此の頃は又社の探字小僧連中からも飴先生と言はれる様になつた。牛肉に飴を入れても好し鶏飴は尙ほ甘い、お涎が出る。

▲女學生さん

髪結び方は二百三高地よりはズツと低くして余り饒舌らぬ人が好きである、じやからと云つて又黙つて膨れて居る人は嫌である、袴は男の様に尻の先きに着ないで少しは上に着た方が好きである、

又人と道で出會した時ウツムイテ女らしくして通る人は慕はしいが殊更に傘で顔を隠して通る人は余り人を見限つた仕打で氣

持がわるい

それから一番嫌なのは道中で英語の本を見るもの、衆人の中で自然主義や女權擴張論を振り廻す者である尙是れを一口に云ふと、どこまでも女らしい女が好きで男らしい女は嫌である

▲先生さん

子供の手を引いて遊び歩く先生は眞に好きじや、そして先生臭い先生が矢張り好きで俗吏臭い先生は嫌じや無論味噌の味噌臭きは善い味噌ではないが眞の味噌になりそこなつて腐つては困る

又校長さんに味方する先生よりは子供に味方する先生が好き嚴に過ぐる先生よりは寛に過ぐる先生が好きとしてドコマデも先生ぶらぬ先生が大好きじや

又女の先生で子供を呼び捨てにする人は極く嫌ひ、殊に又ヴァイオリンよりは裁縫に唱歌よりは家政に氣の向いた人が僕は好き

▲下女どん

井戸端で虱を捕つたり、おナラを放つたり、痒い所を搔いたりする奴は大嫌ひ、又た嬢さんぶつて氣取る下女どんも大嫌ひ、化粧べんつけてナヨナヨと女郎の様なは尙ほ嫌ひ、尻が輕うてハイ〜と聲に應じて立ち廻る愛嬌者が私しや好き、人に近うて客好きで、虎の威をかる狐をば爲ねぬ下女なら私しや好き

▲受付けさん

市内の役所で私の好いた受付さんはあすこと、ここ、そこで、

一番嫌な受付さんは、あすこと、あすこである、氣取つた風で見向きもせず、ツンと澄ましてドコの田舎物かと云ふ調子の受付さんは大嫌ひ、ソイヤイト知イヤラントナ、バカジャゴアハンカと面喰はせる奴はいや、

▲花と鳥

鳥で一番好いたのは鳩で、花で一番好いたのは櫻である、鳩は顔立がやさしくて歩む姿のしほらしいのが好きである又櫻は暖かでありながら、飽かれぬ先きに散るが好き、

又一番嫌いなのは機嫌狂言の七面鳥で松も梅も嫌やではないが冷めたい所が私しや嫌や、(をばり)

◎涼み日記の一節

▲蟬

蟬の聲はやかましけれども無邪氣にして子供らしき所あり故に子供に追はれて終日木々を逃げまはる。奥山の蟬は此世は「ミンミン」と鳴き村里の蟬は「ゼヒゼヒ」此の世を改良せよと鳴く、蟬の聲にも誠あり世の人むだにな聞きすぎず

▲時鳥

泣き過ぎて鶴や鶯に笑はると嫌ひはあれども真心からの聲なれば誰れも是れをなみするものなし、否却つてこれに哀れを寄するは是れ不誠のあればなるべし、泣けよ泣け時鳥赤き血潮のつくるまでよし世の人は笑ふとも。

▲朝顔

朝顔は女らし殊に竹に縋りて立つ所恰も女の男によりて世に立つが如し。而かも其を憂ひとせず自然の儘に咲いてはしほむしほらしさ殊に夫の朝ねする度に、しかめ顔して戒むるは真に賢き婦人とか云はん。

▲蚊

蚊こそ真に哀れなる物なれ、蚊が其子にてある頃は蚊になるまでの浮き沈みと慰めらるれども蚊に成りすませば又忽ち烟にて燻べらる人情の轉變是れにても聊か悟りぬべし、蚊や蚊や吾れ汝に善き事教へん若し今より燻べらるる事あらば必ず主人を連れ出づる迄己れも出づる事勿れ。

▲夕涼み

夕涼みようこそ男に生れたり。まさか丸裸になつて涼んだ譯でもあるまいが何となく涼しき心地す、有り體に言へば湯あみ果てて扇片手に丸裸の夕涼みは兎ても女には望まれぬ事なるべし

◎男も悪いが女も悪い

男も悪いが女も悪い、考へても御覽候へ、今の様に男が妾を蓄へたり娼妓に戯れたりしながら一家の真正否な夫婦間の真正が保たれるものでせうか、而かも内に歸れば知らぬ顔して夫のニセ權威をふりまくるのである形こそ一夫一婦の制であるが實は一夫多妻を實行して居るのだ、是れには男も申譯があるまいがな、又女も女である、負けると云ふ事が女の主徳であると云ふ事はチツトも御存知がなうて、やれドウノ、それコウノと我を立て

と泡ふきて夫にツカミカカル、是れが抑も女の務めか知ら、夫外に亂れ妻内に正義を説くとは現今の家庭ではあるまいか、男も女も胸に手をあてて、よく考へて御覽候へ、一家と云ふものは、女が負けて居る所に和合が出来夫が權威をフリマカス所に樂しみがあるのではありませんか而かも夫が身を正しうすると云ふ事が其一大根本ではありませんか

◎ニコく主義

アハハハ、イヒヒヒ、ウフフフ、エへへへ、オホホホ、あいたく腹が痛い腹が痛い
 オイ君なせそんなに笑ふのじや、マアく君聞き給へ昨日黄菊君が僕に、ニコく主義を教へたのだ、それが如何にもたかし

いのだドウシテ、ドウシテ君其ニコニコ主義の物の見方が
 たかしのだ君笑つちやいかんぞ、たとへばだね、今此處に
 火山が破烈したとすればそれは地球が屁を放つたのだと思ふの
 じや、笑つちや如何ぞ、それから赤貧と云ふ事は金がなければ
 赤恥ちをかき、着物がなければ赤裸汽車に乗るにも赤切符、わ
 かつたかね、それから此ニコニコ主義に大事な事が一つある、
 それはね腹が立つた時は臍の下を押へながら、

福德は此處にあるぞと大黒が

勘忍袋をじつと押へた、

と云ひながら丹田座れ〜と按摩をとるのださうな

君待てそれでは物の見方に就いて一つ質問がある、時鳥の聲と
 云つたら何と聞くのだ、ウン時鳥かね

小便かけたか〜テツペンはげたか〜一合タツキツタカ〜
 と聞くのじや、次いでに今一つ云て置く
 田舎では父をチャン、母をカアと云ふ是れは父は端然として家
 を治め、母は鳥がカアと鳴いたらすぐ起きて働けと云ふ事じや
 それじや君敗北と云ふのはドウ云ふ事だそれはね今まであらゆ
 る學者が此解釋には餘程苦しんだのだ所が今度日露の戦争で始
 めて此意義が解つたと云ふ事じや露軍が連戦連敗で今日も明日
 もとドンドン敗れて北に逃げたのだそこであちらの仲間では僕
 も敗けて北、君も敗けて北と語り合つたのがこの意義じやそう
 な冗談じやないぞ是れは眞面目に云ふのだ福を招致せんと欲す
 るものは須らくニコニコたるべしだ現今の成功家にはニコニコ
 主義の人が大部を占めて居るやうだ、

也。

酒は千杯飲め大釜でわかせ

下戸の立てたる藏はない

年の暮れに咲くビワの花ほご世に哀れなる者はなし、他の花に後れて咲くが抑もの起りにはあれども、北風寒き簾かげに咲くが又哀れの一因也。今一つは生れつきが己に何よりの不運也、梅の如く香ひもなく櫻の如き艶容もなし、只ごこまでも飾らずして無骨也。若し三四月の頃に咲かば桃と同じく節句の餅も戴くを得べく、櫻と共に咲かば花見の宴にも侍るを得べし。さは云へ是れをビワより見れば賑かなる梅や櫻の仲間には彼も聊か出づるを恥づるなるべし。

死んだ鴨二三軒飛ぶ年の暮れ、死んだ鴨の飛ぶ筈はなけれども、

附録完

歳暮に貰つた鴨を又歳暮にやり其れから其れへと遣り配れば、四五軒位はとびまはる債鬼狂ひまはる師走の空貧世帯を持てる妻の心惚ばれていと哀れあり。

大晦日にひるねして人に呼び起されて、金の利子受取る位になれば嬉しけれども今では却つて首を取らるる恐れあり、油断せぬ始末の花が暮れに咲くと昔の人は教へたれども、油断勝ちなる身には花も咲かず蕾も見えず、悲しけれども枯木に鳥の夢計りなり。